第百三十四號

（明治三十年五月廿五日第三種郵便物認可
全年九年四月十五日發行總一萬百三十四號
十五日）

本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置きあれば其廣告は全國の公衆一般に知らるゝ便宜あり

目次

篇章

一、1、發心　鈴木暲學

二、1、經典講究の法式に就て　笹川眞應

八、2、信仰　今成乾隨

八、4、國本培養の道　梶木日種

十一、1、道法の尊重　山根顯道

十二、佛祖の遺籍、佛子の本領、精神の修養　本多日生

隨喜の筆　横山生

小倉君著日經上人を讀む　古定賢正

雜報

發心

鈴木暲學

世間の通用語の中に發心と云ふことがある、此語は如何なる場合に使用せられつゝあるかといふに、凡て善惡に拘はらず、一の目論見を立てゝ、其仕事に着手んとする心の、初めて發りし際に、多く使用せらるゝ樣である、此發心と云ふ語は、素と佛敎から出た語で、佛敎の中に發心と云ふことが說てある、是迄佛敎の崇高尊重すべきことを一向認識せざるものが、何等かの動機に依て、初めて其佛敎尊信の念慮を啓發して、其敎に基かんとする心を發せしをいふのである、之を詳しく謂へば發菩提心發信心とも云ふべく、發菩提心とは初めて無上道を求むる心の發りしこと、發信心とは初めて佛敎尊信の念が生起せしことである、

そこで、善良なる目論見を立てゝ、善良なる仕事を爲さんことを發心したのも發心なれば、又邪誑なる目論見を企て、人に迷惑を及すが如き仕事を爲んことを思付たのも、矢張發心に相違ない、處が其善良なる方に發心して、善き仕事をすれば、世間一般何人も之を歡迎し賞讃するであらう、若し之に反して邪誑なる方に發心して、人に迷惑を及すが如き仕事計りしては、世間之を攻擊擯斥することは明白であろう、其發心の如何に依て、自他の受くる利害禍福に至ては、實に格段の差を生ずるのだから、仔細に考察すれば發心の忽にできざることは、誰れしも容易に認められるだろうと思ふ、

更に佛敎で謂へば、其發心といふことは一層重大の事で、特更注意を要すべき重要の御噺である、發心とは前に述べた如く、發菩提心と云ふことであるが、其菩提心を發すには、何等かの必用に迫りて、始めて發るものである、處で其必用なるものは、皆人々に依て異るものであつて、甲の人の必用と認むるものも、乙の人には其必用を感じない、丙の人に取て不必用のものも、丁の人に取ては大必用のことがある、要するに人々の志す所學ぶ所と其機類とに應じて、其必用の種を類異にする樣である、だが私は其等の復雜なることは後廻しにして置きまして、茲に一番手近ひ早分りのことから御噺致そうと思ふので、それは何事かと云ふと、人間は甲の人も乙の人も丙の人も丁の人も誰彼に拘はらず、皆菩提心を發さねばならぬといふことである、ドーして人間は菩提心を起さねばならぬかといへば、菩提心を發して始て人間と成るのだ人間の仲間入りをするに就ての必用條件が、此菩提心を發すことである、偖て人間は昔より萬物の靈長と持噺されて居るこれは人間には他の動物よりも其特長が勝れて居るからであろう、其特長とは何んだ、只毎日飲だり喰ッたり衣たり寢たり起たりして居るのが人間の特長ではあるまい、少くも人間

は、其品性を高尚ならしむること、道義を實踐すること、智識を啓發すること、此等を完ふしてこそ、始めて人間と謂はれるのである、

處て、發菩提心といふものは、驚くべき感化の力を持て居るもので、是迄他人が善事を作すを見て、之を嫉み却て之を妨害せんとする質の者も、菩提心を發せしが爲め、斯る場合には隨喜同情の念を起す人ともなる、又是迄道ならぬことに愛著を起し、常に惡名醜聞の高き者も、菩提心を發せし爲めに、其愛著を捨離する心ともなり、又是まで高慢心強くして兎角他を見下げ威張り勝の者も菩提心を發せし爲め、慎み深き人となり又是迄瞋恚の炎盛にして、兎角些細の事にも立腹して、人に忌み嫌はるゝものも、菩提心を發せしが爲め、忍耐心を起す樣にもなり、又是迄年中懈けて何等の勞働もせず、只空しく遊食するものも、菩提心を發せしが爲め、勤勉勞働を厭はない樣になり、又是迄常に心浮薄にして、兎角氣心の動搖する者も、菩提心を發せし爲め、冷靜不動の人となり、又是迄殺伐爭鬪を事とする亂暴のものも、菩提心を發せしが爲めに、慈悲深き人ともなり、又是迄種々なる罪惡を犯して得々たるものも、菩提心を發せしが爲めに、罪惡を悔いて善根功德を積む了簡ともなる、又是迄假し善事を作せるも、兎角退心勝にて進取の氣象に乏しきものも、菩提心を發せしが爲め、勇氣を增して一層善事に勵精する人ともなる、斯の如く發菩提心は、品性をして高尚ならしむるの力用を持て居るのである、

是の經ば能く菩薩の未だ發心せざる者をして菩提心を發さしめ、慈仁なき者には慈心を起さしめ、殺戮を好む者には大悲の心を起さしめ、愛著ある者には能捨の心を起さしめ諸〳〵の慳貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛んなる者には忍辱の心を起さしめ、諸〳〵の散亂の者に禪定の心を起さしめ、愚痴多き者には智慧の心を起さしめ、未だ彼を度すること能はざる者には彼を度する心を起さしめ、十惡を行ずる者には十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者には無爲の心を志ざしめ、退心ある者には不退の心を作さしめ、有漏を爲す者には無漏の心を起さしめ、煩惱多き者には除滅の心を起さしむ、善男子是を是經の第一の功德不思議力と名く（十功德品）

此經文を拜讀すれば、前述の意味が尙更明白になるだろう、

道義を實踐するといふことは、父母に孝行を盡し、主君に忠節を竭し、一般公衆に仁愛を施し、義を重ずる等のことを云ふのだ、處て是迄一向道義の觀念だもなきものが、菩提心を發せし爲め、進んで忠孝仁愛の道を竭さねばならぬ心を起すようになる、これは其筈で、眞實の道義は佛道に基かねば其道を完ふすることができないのだ、何せなれば、佛道以外の道では、其根據が淺い、所謂今生の事計り敎へて未來のこ

とを說かない、是れが道義上重要のことで、道義の根據は此點に存するのである、父母に孝を盡すにしても、今生の肉体を養ふだけでは、只孝道の一端を盡せしに過ぎず、未來永遠に父母が神を扶くることができなければ、結局に至て不孝に陷るではないか、國主に忠を竭すにも、只今生に身を以て仕事たる計りでは未だ忠とは謂へぬ、現當二世ともに其安泰を計らねば、是亦結局不忠となる譯だ、

其恩德を思へば、父母の恩、國主の恩、一切衆生の恩、父母の恩也乃至是を報せんと思ふに、外典三墳五典孝經等によつて、是を報せんと思へは、現在を養ふて後生は助けがたく、身を養ふて神は扶がたし、（內千日尼鈔）

儒家の孝養は今生にかぎる、未來の父母を扶けざれは、外典の聖賢は有名無實なり、外道は過未をしれども、父母を扶くる道なし、佛道こそ父母の後世を扶れば、聖賢の名はあるべけれ、（內開目鈔）

此等の祖書に仰せられたる通り、佛道以外の道では、其忠孝共に只今生に限り、廣く現當二世に渡りて之を盡すの道が敎へてないから、淺近浮薄にして結局有名無實に歸するのだ、大乘を持つ者は、一切の人を觀ること猶佛の如くし、諸の衆生に於て、父母の想の如くす、（結經）

若し自ら調順せんと欲せは、慈悲を勤め修むべし、（結經）

此經文の如く、一切公衆に對し、常に佛の如く、父母の如き思想を持てば、自然に仁愛を盡し、禮義を重んずるに至るものである、處で、此思想といふものは、全く經文の通り、大乘を持つ處から全く造り出すので、其大乘を持つのが發菩提心の結果であるから、結局かゝる思想を起すのも、發菩提心の力と云はねはならぬ、

當時は文物旺盛にして、智識を啓發するの機關は實に至れり盡せりて、殆ど具備せざることなき狀態であるから、此順潮にて推移れば、世は久しからずして、智者學者を以て充され、蒙昧なるものは頓て跡を絕つようになるだろうと思はれるが、事實はなか〳〵左樣でない、成程智識を研く機關は具備して居るに違ひないが、其文明の智識を具へた堂々たる人物が、頓だ心得違ひをして、人間にあるまじき動作を働くとか、又は陰に陽に種々の罪惡を造りつゝあることが、隨分今日に多いではないか、又當代名聲高き學者が頓てもない邪說を唱道して人を惑はすが如きことも、隨分其類例に乏しくない、智者が却て愚者に嗤笑され、學者が却て無學者に劣るような事實が、隨分今日の世に澤山ある、要するに此等は皆菩提心を缺いて居るから斯る現象を呈するのだ、菩提心なきものは信念を扶植することができない、信念の扶植なきが故に智識あるものは却て邪智に陷り、學殖あるものは却て邪僻に走るの結果を見るのだ、故に智識を啓發するにしても、菩提心を發さねば眞實の智識を增發すること能はざる道理である

人間の淨土を扶殖するには、是非菩提心の力に據らなければならぬことを述べたので　其發菩提心に就て更に根じめをして置ねばならぬことがある、幷は菩提心の菩提とは、無上道といふことで、其無上道とは即ち法華經のことである、其法華經を信ずる心を起すのが、即ち發菩提心である、法華經の不思議力が發菩提心に現はれて、種々の物を利することになる、所謂人間の品性を修養して高尚ならしむるとか、忠孝仁義の道義を實踐するとか、智識を啓發するが如き作用を現はす樣になるのだ、十功德品の善男子是を是の經の第一の功德不思議の力と名く云々とある、是經とは法華經のこと、其功德不思議力とは、前に述べたるが如く、殺戮嫉妬愛著等の惡品性をして、大悲隨喜能捨持戒等の善良なる品性に化せしむるの力を謂つたので、法華經には此不思議力を具へて居るから、法華經に依てこそ、初めて品性の修養ができるのだ

父母に孝道を盡すにしても、法華經已前の大小乘の經宗にては、成佛得道の法でないから、父母の未來を扶くることができない、父母の未來を扶くることができなければ、孝道とは謂へぬ、而るに法華經は一切皆成佛の法なるが故に、父母をして未來成佛得道の利益を得せしめて眞實の孝養を果すことができる、是れ法華經獨特の功德力である、

而れども法華已前等の大小乘の經宗は、自身の得道猶かないがたし何況や、父母をや、但文のみあつて義なし、今法華經の時こそ、女人成佛の時悲母の成佛顯はる、達多惡人成佛の時、慈父の成佛顯るれ、此經は內典の孝經なり、(開目鈔)

されば法華經を持つ人は、父と母との恩を報ずる也、我心には報ずると思はねども、此經の力にて報ずる也(內九上野鈔)

此等の祖書を拜見すれば、法華經の力に依つて、眞實父母の孝養を果す所以が明白になるだろう、

國主に忠を盡すことも、唯々身を以て奉公する計りが忠義でない、法華經を其國に弘めて現當二世の安泰を祈るのが肝心である、

國主の恩を報せよとは、生れて己來衣食のたぐひより初めて皆是國主の恩を得てあるものなれば、現世安穩後生善處と祈り奉るべし、(九外上野鈔)

其現世安穩後生善處を祈るには、法華經の力によらねば其功を顯はすことができぬ、

慈悲仁愛にしても、法華經を持つものでなければ、眞實慈悲が現れ出づるものでない、前に揭げ出せる結經の文に、大乘を持つ者は、一切の人を視ること、猶佛の想の如くし云々とある、其大乘とは法華經である、法華經を持つものにして初めて斯の如き慈悲の念を生ずるのである、又十功德品の文に、是の經は、……慈仁なき者には慈心を起さしめ、殺戮を

好む者には大悲の心を起さしめ云云とある、是の經とは法華經なり、法華經の不思議力に依つて、慈仁心なきものも慈心を起すことになる、是偏に法華經の力である、

智識を啓發するにしても、法華經を信じて菩提心を養成し其菩提心に住して、智識の增發を庶幾ねば、決して滿足を期することができない、

世間に充足すること雨の普く潤すが如し、貴賤上下持戒毀戒威儀具足せると及具足せざると、正見邪見利根鈍根に、等しく法雨を雨して懈倦なし、(藥草喩品)

此經文の如く法華經の法雨に潤へば、正見邪見利根鈍根共に法益を受けて滿足することができる、故に智者も學者も愚者も無學者も、法華經の法益に潤ふてこそ、佛の加被を受けて正理正道を踏んで滿足の人間と爲れるのだ、

之を要するに、人間の特長を扶殖し、圓滿の性格を起り出すには、凡て法華經を中心として、其不思議力に依らねば、何事も徒勞に屬して何等の功果を收獲せずして終るに至らん眞に誡むべきことであります、故に宗祖之を訓誡して曰く

受がたき人身を受けて値がたき佛法にあいて、爭か虛しくて候べきぞ、同く信を取ならば、又大小權實のある中に、諸佛出世の本意、衆生成佛の直道の一乘をこそ信ずべけれ(內二十二持法華問答抄)

眷々服膺一刻も此訓誡を忘るゝなかれ、

二、教相篇　1　總要

經典講究の法式に就て

笹川眞應

大聖釋迦牟尼佛救世のため、一代五十年の間言說せられたる慈敎を滅後において、迦葉阿難等が結集したるもの、これ則ち浩瀚なる佛敎經典である。

この佛敎經典を講究して大聖佛陀が救世の本意を明きらめ菩提の眞味を味ふて無上の得益に浴し、更に進んで自他俱安の使命を果たすには、是非共その經典をたどりて、會得するの外なからんことは、佛陀の敎訓にも明らかである、法華經に云く

「如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及び次第を知て義に隨て實の如く說かん」

然り而して此に注意すべきは、一代五十年の間機類に應ずるために、又は機根調養のために、擬宜誘引等の善巧方便を用ゐられたるゆへに、大小偏圓淺深隱顯等の差別隔歷がある樣なれども、佛陀が大慈悲の活動は一代五十年の間、始終一貫してれることを忘れてはならない、されど輕病には輕藥を與へ重病には良藥を與ふべき筋と同じく、佛陀の傳道の方法もこれと變りないが機類調養の如きは、母の愛で父の嚴愛でない、慈悲は慈悲でも一分の慈悲で、所謂佛陀眞實の知見に到

達しむべき大慈悲の權化であることは左の經文によりて明らかであります。

「諸の衆生種種の性種種の欲種種の行種種の憶想分別あるを以ての故に諸の善根を生せしめんと欲して若干の因緣譬諭言辭を以て種種に法を說く所作の佛事未だ曾て暫らくも廢せず」と

これ、法華經壽量品の金言にして、如何に佛陀一代五十年の間始終一貫したる大慈悲の活動たることが、直に了解であると信じます、

由此觀之、經典を講究して大小淺深等の次第を仔細に判定せんとするは、必らず然らしむることである、されば佛滅後にたける人師論師のすべてが、鋭意力をこの講究に努めたるは、實に宗教史上にたける一大美觀で、花上花を添ふるが如く浩瀚なる佛教經師は、それにも增すべき隨伴者を得た、これ幸か不幸か暫らく諸君の判斷に任かせ、これより經典講究の法式に就て述ぶる所あらんとす、

權て物の輕重を知り、度りて物の長短を知るは社會の通則で、輕重長短を知るには一定の標準がある、經典講究もその通りて、一定の法式標準がなければならない、己に佛陀も所說の經の因緣及び次第を知てとの敎誡もあることなれば、甲の經典と乙の經典との關係丙の經典の來由、丁の經典の內容と此の如く次第淺深を究明めんには、確かなる法式標準なかるべからず佛滅後の人師論師經典が究明には必らずその人の考へを以て法式と標準を立てました、龍樹の四悉檀道宣の序正流通の三段法天台の因緣約敎本迹觀心の四釋の如きその一例である、經典講究に就て佛滅後數多の人がこの道をたどりましたが、最も光輝ある歷史を有する人は龍樹天台及び日蓮の三師であると思ひます、

龍樹は荒蕪の土地を開拓し天台は繩墨をいれ日蓮は家屋を建築したるが如き觀がある、私はすべての異論を排して印度にては、龍樹を推し支那にては天台をあげ日本にては日蓮を推すの至當であるを認むるものである、經典講究の法式に就て其人によりて違があるがその文義を判じてその理を究むるは何人も踐むべき所であるとせば、經典講究の二大法式ともいふべきは、敎相觀心の二つである敎相觀心の二大法式は、佛敎界にたける通途の法式であると謂ふも差支へないと信じます、果して然らば佛滅後の人師論師が比量判定も同一でなければならないに、人毎に相違のあるは怪むべきことであると、反問する御方もあろうが、それは比量の標準を誤るゆへである、現今流布の各宗が橫道に陷てゐるのも、乃ち祖師と仰ぐ人が比量標準を誤りし結果である。

佛陀一代五十年の間說示せられたる經典の敎相を明らめ理の淺深を識得するは、衆生救濟に大關係がある我等の希望は、佛陀常住の大慈悲に浴し、佛陀眞實の慈敎を受くるにあり、

何れの經典によれば、これを感受らるゝかは、實に我等が得益に關する大問題であると思ひます、これは前に引用たる如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及び次第を知て義に隨て實の如く說かんとある次下の文によりても諒ふことが出來ないてある

「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行

とて能く衆生の闇を滅せん」と

敎の淺深次第等を明かにするは、衆生の得益に至大の影響を及ぼすゆへ、佛陀も懇切叮寧に訓誡せられたるは今述べたる經文の通りてある、敎相觀心の法式及び比量は注意に注意を、加へなければ、多くの人をしてながく邪坑に沈ましむるの罪惡を擔成るの害がある、前に述たる各宗は此の點にはまるものである、各宗の祖師は一代の敎相を判定するに、比量の標準を誤るからすべて佛陀の本意に相違する、華嚴宗の如き眞言宗の如き禪宗の如き念佛宗の如き何れも、敎義に大欠點のあるは、經典講究に就ての出發點とも謂ふべき敎相判定に於て大なる誤謬があるに職由ものと謂ふべきである、更に今一箇條の誤解があるそれは、前に述べたる佛陀內證の大慈悲の活動が一代五十年の間一貫しておると同時に、一代の說敎も脈絡が嚴然としておることを忘るゝからであります、禪宗の如き最もこの點に不注意千萬で、彼等の如き、佛陀を貶して達磨をあげ、すべての經典を度外にする、その故に彼等は屢奇矯の事を述べて人の意表の外に出づるを得たりとなす、又眞言宗の如きは、顯密の二敎にわかち大日法身釋迦應身と立て、顯敎は眞理を得ず、大日秘密敎こう眞理を得たりと說くが、一代五十年佛陀の說法にたいて、大日經はその以外であるか、眞言宗は佛敎以外の宗旨なるか、これ等を反詰せば彼等は何時も答に困み色々の彌縫をなすが、これ畢竟その敎祖が誤謬によるもので、此の弊習を受けたる空海は、秘藏寶鑰といへる書に十住心の比量を立て彼が誤れる敎觀の判定をなしたるは、ながく彼れ空海が邪坑に沈吟するのである、淨土一門の輩も又これと同じく、阿彌陀中心の邪義にかぶれ、才能ある畜生と指斥せらるゝも、皆その敎祖と仰ぐ人が經典講究に就て、比量標準を誤るの結果であります、事物を測量するに比量標準を誤ればその受る損害は多くの人に迷惑を與へるてないか、これに依て佛陀も思を盡して共に度量せよと警告せられた、經典講究に就て敎相判の大切であることは、繰かへし述べたる所なり、而して佛滅後に於て一代の敎相を正當に判定したるは、前にあげたる龍樹天台日蓮の三師なれども、龍樹は材料を蒐集に努めたれば、畫然たる敎相判の見るべきものなし、天台にいたりて形式だけは大成したれども、專ら權實の比量を嚴確になしたるに止まりたれば、いまだ如來の眞實義があらわれない、日蓮にいたりて、如來の眞實義をあらはして、一代敎相の淺深次第等を明瞭にせられました

これについて、權實本迹相待絶待の異目がある、これは他日に讓り今は天台が經典判釋に就て五時八教とわけ、これによりて教相觀心を示したるが、その中に於ける教相判の比量標準は如何なるものなるかを述んに、天台は左の比量を以て標準とせり、

一　根性の融不融
二　化導の始終不始終
三　師弟の遠近不遠近

これ所謂天台が三種の教相で、天台はこの比量標準を立て、佛陀一代の經典を判定せられた、第一は衆生の根性あまねく融合せりや否や、第二は化導の始め終り一貫せりや否や、第三は佛の壽命及び師弟の關係に欠くる所なきや、否や斯の如き筆法にて一糸紊れず判定を下だしたるも、元來天台は權實判定を正意として本迹判定に及ばざるゆへに、未だ佛陀の大慈悲を顯はすことが出來ない、日蓮に到りては更に一頭地を出て最も明白に判定せられた、それは隱顯の比量標準によりて佛陀一代の經典に對し、何れが佛陀の眞實義が顯れておるやを闡明にせられた、

「黑白の如く明かに須彌芥子の如くなる勝劣尙迷へり況んや虛空の如くなる理に迷はざるべしや教の淺深を知らざれば理の淺深を辨ふる者なし」と

すべての上に注意を與へられ、教理の完全なるものにあらざれば、得益また隨て得るなきを示され、更に自家獨歩の見解に就て左の如く述べられてある、

「日蓮が法門は第三の法門なり世間に粗夢の如く一二を申せども第三を申さず候第三の法門は天台妙樂傳教等も粗之を示せども未だ事おわらず」と

天台の教相判は雞群の一鶴で、能く比量標準の正確を得たれども、素より天台は權實判定の立場なるがゆへに、佛陀の眞實義を現實にすることが出來ない、形式備はるも、精神これにこもらない理由を粗これを示せども事おはらずと、申されました、尙委しいことは又あらためて說明いたします。南無妙法蓮華經

聖訓

本門壽量品をもつて見れば、壽量品の智慧をはなれては、諸經は跨節當分の得道共に有名無實なり

天台大師此法門を道場にして獨り覺知し、玄義十卷、文句十卷、止觀十卷等にかきつけ給ふに、諸經に二乘作佛、久遠實成絶てなき由を書き給ふ、是は南北の十師が教相に迷ひて三時四時五時四宗五宗六宗、一音半滿三教四教等を立て教の淺深勝劣に迷ひし此等の非義を破らんが爲に、まづ眼前たる二乘作佛久遠實成をもつて諸經の勝劣を定め給ひし也

（外小大分別抄）

信仰

八、行法篇　2　信仰

今成乾隨

佛教と云ふものは學問として是れを研究するに於ては、一生の間苦しんでも見極めると云ふことは困難であります、然しながら佛教の利益を受け佛教の目的に契合するのは至つて簡單であります、例へば醫者の學問をするのは非常に困難であつて際限ない樣でありますけれ共、自分の病氣を愈すのは醫學の智識はなくとも名醫に信賴し名醫の與ふる藥を服すればうれて宜しいのである、いくら醫學の智識があつても病人であれば何の役にも立ちません、よし醫學上の智識がなくとも身體か健康になれば其人の幸福は實に多大なものであると信じます、其の如くいくら佛教を研究し一切經を自在に說明することが出來ましても、自己の煩悶苦痛を脫却することが出來ませんければ何の役にも立ちません、夫れに反して佛教上の智識はなくとも、自己の煩悶苦痛を脫却することが出來れば非常に幸福の次第であつて、佛教の目的に契つた人であります、佛陀は名醫の如く佛教は良藥の如く吾等は病人の如くであります、佛樣の樣な智慧がなくとも佛に信賴し佛の教を實行するに於ては、我等の苦痛は救はれるのであります、諸君も佛教を研究すると云ふことは後廻しにして、佛教によりて救はれることを願ふのは取りも直さず佛陀の本意に契ひ諸君の希望に滿足を與へるのであります、佛教を學問として研究するは極めて高尙でありますけれども、佛教を宗教として實行するには最も平易であります。

佛教とは何であるかと云ふに慈悲深き御佛の吾等を救はんが爲めに說き給へる教でありまして、其佛の教に從ひ御佛と少しも異はない樣になれよとの教であります、

方便品に我れ本誓願を立つ、一切の衆をして我が如く等しくして、異なることなからしめんと欲しき、我昔の所願の如き今は已に滿足しぬ、一切の衆を化して、佛道に入らしむ、

壽量品に「毎に自ら此の念をなす、何を以てか衆生をして、無上道に入り、速かに佛身を成就することを得せしめんと、

此の兩品の經文を拜見致しますれば、御佛の教を垂れ給ひたる、御本意は御佛の如くになれよとの教であるとは明白であります、然らば御佛とは如何なる御方で如何なる處に居られ又吾等衆生は如何なるもので如何なる境遇にあるか、又御佛と我等と如何なる關係因緣あるか、御佛は如何にして吾等を救はんとし、又吾等は如何にして佛になれるのであるかと云ふことを、一通り會得するの必要があります、此の筋道さへ簡單に了解することが出來、此れを實行致しますれば、一生の間佛教を研究するの煩を避け、僅に五分間か十分間にて事が濟むのであります、

今私が申しました佛樣と云ふものは、阿彌陀樣や藥師如來を云ふのではなくて釋迦如來のことであります、其の釋迦如來も天竺に生れて難行苦行をせられ、ヤット悟りを開いた、佛樣ではなく久遠實成と申しまして、久しく遠い昔に於て、眞實の成佛ましました佛樣であります、過去も常住現在も常住、未來永劫常住所謂無始無終三世に實在ます、廣大無邊の大活動を現はし給ふ佛樣であります、故に此の佛樣を本佛と申すのであります、かの彌陀藥師等の佛は、本佛の分身と申して兒分か、垂迹の佛と申して影法師か、夢中の虛佛と申して妄想か、さもなければ無緣の佛であつて、吾等には何の因緣關係もない佛であります、依つて佛樣と云へば直ちに久遠實成の南無釋迦牟尼佛にきまつて居ると御承知あれば、うれて宜しいのであります、扨て此御佛は御壽命が際限がない計りでなく、其智慧は一切の眞理を照破して到らざる所なく其慈悲は十方に周徧して利益窮まりなき次第であります、此の御佛は同居の淨土即ち靈山にましまして、我等の爲めに常住に形聲の二益、即ち端嚴の御貌と美妙の音聲とを以て、常に慈悲の活動を現はし給ひつゝあるのであります、然らば何故に吾等は、此の御佛の御貌を見奉ることが出來ないのでしやうか、何故に常住の說法を聞き奉ることが出來ないのでせうか是れ畢竟我等の心が轉倒して居るから、見れ共見へず聞けども聞へずであります、

壽量品に、常に此に住して法を說く、我常に此に住すれども、諸の神通力を以て、顚倒の衆生をして、近しと雖とも、しかも見へざらしむと、

仰せられてあります、御佛と我等は一の同居土に住ひして居りますけれども、惡業の因緣を以て、同居の穢土に住して居りますから、身体の苦痛や精神の煩悶や、四苦八苦寢ても覺めても、絶間なく襲ひ來りて、諸に苦患の中に彷徨ひつゝあるのであります、斯の如き天地雲泥の相違あるにも拘らず、本佛と吾等とは本來親子の因緣關係ありと云ふに到りては、何と惑耳驚心の喜びではありませんか、自分等の如き、罪業深き愚痴蒙昧の凡夫の考へには、本佛を親であるとはどうしても信じられません樣なれ共、御佛は、

壽量品に我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふものなりと仰せられてある以上は、當レ生二信心一無レ有二虛妄一て、決して疑つてはなりません、ア、今にして考へて見ますと、自分の親は長者であつて、自分は長者の子である自分は長者の子でありながら、親に背きて親を捨て流浪の結果、長者たる親を忘れて自ら下賤の子であると思て居つた樣なものであります此れ皆自業自得で自分の心が顚倒して居るからであります、我心顚倒するが故に生死の長夜に迷ひ、諸の苦患に逢遇しつゝあるのであります、然るに今慈悲深き我父なる御佛は、姿こう拜し奉ることが出來ませんけれども、我れは汝の父なる

ぞ、我汝を救はんが爲めに暫くも廢む時なしとの御聲を耳にせる以上は、直ちに貧窮下賤の凡夫の夢醒めて、貴顯長者の御手にすがり、同居の淨土なる、本佛の住家に行かねばなりません、

大慈大悲の父なる本佛は、我等の境遇を憫れみ顚倒の心を正さしめんと思召し、佛敎の生命たる妙法蓮華經を我等に授けられたのであります、即ち釋尊の因行果德と申して、菩薩の修行の功德佛果莊嚴の功德、一切を此の五字の袋に裏み、我等に授與し給ひたのであります、故に我等も亦佛の敎を信じ妙法蓮華經を受持し南無妙法蓮華經と信念口唱するに於ては佛になれるのであります、佛の敎は唯南無妙法蓮華經でありまして、佛になる敎も唯南無妙法蓮華經であります、南無妙法蓮華經の外に、本佛の敎はなく又成佛の道はないのであります、我等は只本佛の慈悲を信じ、南無妙法蓮華經を信念口唱するに於て、顚倒の心自ら正しくなり、遙かに本佛の尊影を拜して、本佛の慈音に接するとが出來るのであります、宗祖が「佛の我魂に入り替らせ給はねば唱へ難き題目なり」と仰られたるが如く、本佛の大慈悲を感受して、初めて眞の題目を唱ふるとが出來るのであります、本佛の大慈悲を信せずして、唱ふる題目は所謂空題目であつて、成佛の因とはならないのであります、火々と雖も手に取らざれば燒けず、水々と雖とも口に飲まざれば水の渴しさも止まず、只南無妙法蓮華經と口先ばかりに唱へましても、十分の利益あるべき筈はありません、雀のチューチューは無意味であつて忠君のチューとは大ひに違ひ烏のコーコーはやはり父母に孝と云ふコーとは、丸て意味が違つて居ります、忠と云ふ言葉の裏には、必ず君と云ふ觀念が聯想し、孝と云ふ言葉の奥には、必ず親と云ふ事が見へます、君を離れ親を忘れたる忠孝は、雀のチューと烏のコーと何の違ひがありませうか、其の如く南無妙法蓮華經と唱ふる時、直ちに本佛を直覺し始めて救濟のであります、妙法蓮華經は眞に本佛の魂にして、亦功德である、文字に非ず義理に非ず本佛の活力である、救濟の網である、本佛の慈悲は妙法に依りて吾人に加はり、吾人は妙法の信仰に依りて本佛に徹するのであります、本佛と吾人との感應は、唯一妙法に於て交通するのである、吾人は妙法信仰の時、始めて佛子と云はれ、不孝の罪をのがれるのであります「佛の我魂に入替らせ給はねば唱へ難き題目」であつて、南無妙法蓮華經と唱ふる時、始めて本佛の實在を遙拜する事が出來るのである、吾人の唱ふる題目は吾人凡夫の聲に非ずして、實に常住此說法の妙音である、吾人は佛陀化し若しくは佛陀化としつゝあるのである、凡夫の魂が一轉して佛の魂の住家となり、同居の穢土が一轉して同居の淨土となる、妙用不可思議の狀態である、今平易なる持法華問答抄の一節を引いて、信仰の指針と致しませう、

譬へは、高き岸の下に人ありて、登ると能はざらんに又岸の上に人ありて、綱をねろして此綱にとりつかば、我岸の上に引き登さんと云はんに、引人の力を疑ひ綱の弱からん事をあやぶみて、手を納めて之をとらざらんが如し、爭でか岸の上に登ることをうべき、若し其言に從ひて、手を伸べ是を取らんには即ちのぼるとを得べし、唯我一人能爲救護の佛の御力を疑ひ、以信得入の法華經の教の綱をあやぶみて、決定無有疑の妙法を唱へ奉らざらんは、力及ばず菩提の岸に登る事難しと。

岸の上とは、同居の淨土であつて、岸の下とは同居の穢土であります、岸の上の人は、常住の娑婆即ち靈山にまします久遠實成の釋迦牟尼佛であります、岸の下の人は無常の娑婆即ち穢土に苦しむ吾人凡夫であります、吾人凡夫は學問研究の力に依りて、佛佗の境界に達する事の不可能なるは、猶岸の下の人が斷岸絶壁を攀ぢ登りて、岸の上に登るとの困難なるが如くであります、此を以て本佛の大慈悲禁ずる能はずして妙法蓮華經を授與し、此妙法を信念口唱すれば、必ず靈山淨土に救ひ上ぐると仰せられたるは、岸の上の人が綱を下して此の綱に取りつかば我岸の上に引き上さんと云はれた樣なものであります、然るに、吾人凡夫は本佛の實在を信せず、よし信ずるとするも本佛の大慈悲の力を疑ひ、よし其慈悲を疑はずとするも妙法蓮華經は果して吾人を救ふに足りるや否やと躊躇し、是れを受持せざるに於ては、引く人の力を疑ひ、綱の弱からんとをあやぶみ、手を納めて取らざるものと一般ぞうして靈山に往詣するとが出來ませうか、若し本佛の大慈悲を信じ、妙法の救濟力を仰ぎ、其の通りに信行すれば佛果を得ると、決して疑ないのであります、同じ娑婆世界でありましても、同居の淨土は常樂我淨の四德を具し、同居の穢土は無常無我不淨の相違がありますから、諸君は一刻も早く大信力を起し、毎自作是念の大悲願に漏れない樣に、今身より佛身に至るまで、能く持ち奉る法華經本門壽量品の三大秘法、事の一念三千是好良藥の南無妙法蓮華經と、信仰致すが肝要であります、

聖訓

夫信心と申すは、別にはこれなく候、妻のをとこをれしむが如く、をとこの妻に命をすつるが如く親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに、法華經釋迦多寶十方の諸佛菩薩諸天善神等に信を入れ奉り、南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申候也、しかのみならず、正直捨方便不受餘經一偈の經文を、女のかがみを、捨ざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしも捨る心なく、案じ給ふへく候、

（外一、妙一尼抄）

八、行法篇　4　道義　一、總要

國本培養の道

梶木日種

今や吾國は日露の戰役に大捷を博した結果として、優に世界の强國の伍班に列するとを得たのは、吾人國民が等しく悅ぶ所である、有史以來未曾有の大戰爭に於て偉大なる功績を收め得たのであるから、世界の列國が吾國の武勇に驚倒したのは尤な事である、而して烱眼なる彼の歐米人は、我國の戰捷の原因は何であるかを研究てし、全くこれは砲後の力であると信じて居る、これは頗る適評である、何となれば日露の大戰爭には、實に吾國民の忠勇義烈の特性が遺憾なく發揮せられて居る、この精神的の活力が總ての根底となつて、終に連戰連捷の好結果を收めたに相違ないのである、然らば吾國民は今よりしてこの戰捷の榮譽を擔ッて、又この國運の興隆に伴ッて、實質的にも、精神的にも、果して能く發展進歩の成果を收め得らるるだけの大覺悟があるであらうか如何であらう、これは至極重大なる疑問といはねばならぬ、故にこの事は姑く後廻しとして、それよりは先づ目下吾國民の狀態は如何なであらうか、取分けその心的狀態即ち心の持ち方を仔細に觀察したならば如何なであらうか、吾國民の總てが果して興國的大國民として、毫も恥かしからぬ品性を具へて居るであらうか、這は吾人が今更喋々するまでもなく、社會の照魔鏡ともいふべき新聞紙などを見たならば、如何に現在の國民の最多くが背德不義に陷りつゝあるかゝ判明するであらう！しかもこれ等の醜惡なる徒輩の中には、尙ほ能く品性の何ものたるかを知つて居るものがある、倫理道德の意義や敎訓をも解して居りながら、毫も反省するとなく恬として罪惡行爲を敢てしつゝあるといふに至つては、なんと實に寒心せざるを得ないではないか

昔希臘國の雅典府に於て、共和政治を表彰すために演劇を公開したとがあつた、その時一人の老紳士が時刻に後くれて參會したが、それが爲めに自己の年齡と資格とに適當したる座席に着くとが出來ず困り果てゝ居つた、處がこれを數多の年若き紳士連が見て、この老紳士を手招きして、自分共の座席を讓らうといふ意を示した、そこで老人は喜んで群衆の中を推分けて誘はれたる座席に行ッて見ると案に相違して若紳士連はギッシリと坐り詰めて、中々席を讓る樣子がない、これ全く老人が見物の面前で弄ばれたのである、然るにこの惡戲があらゆる雅典人の座席に廻り〳〵演ぜられた、かゝる折には外國人の爲めに特別に設けられたる座席がある、老紳士は餘りのとに赤面して詮方なしに遂に「スパルタ」人の爲めに設けられてある座席の方へ逃げ込んで隱くれた、すると誠實なる「スパルタ」人は一同起ち上ッて、大老に紳士を尊敬し自分

等の座席を讓ッて着席せしめた、この時雅典人は「スパルタ」人の德行と自分共の無禮とに心付き、滿場一同にドッと稱賛の聲を揚げた、彼の老紳士は鳴の鎭まるを待ち兼ねて叫び出した「雅典人は善行の何物たるかを知ッて居る、しかしスパルタ人は能くこれを實行した」といふたとがある

この昔話を思ひ出すと、直ぐに吾國民の現狀が聯想される、吾國民は文明の敎育を受けて居る、倫理道德も學んで居る、固より善行の何物たりや位は心得て居る筈である、然るに實際はなせ實踐躬行を努めないものが多くあるであらうか、この雅典人の惡戲の如きとは只一笑に付し去るとが出來るが、吾國民が恬然平氣で罪惡を犯しつゝあるに至ッては、實に何ともいひやうのない情ない現象ではないか、これは果して國民うれ自身の罪であらうか、將た末世澆季の然らしむる處と斷念めねばなるまいか、抑も亦他に何等かの因由がある爲めであらうか、これに就て吾國現在の或る宗敎學者が論じて居るとがある

現今我國に於ける世道人心の頽敗、宗敎(佛敎)の無勢力を致したるは、單に國家社會の上より觀察すれば、日本の社會及び爲政者が自ら招けるの禍なりと謂はざるべからざるな、り彼れ等が宗敎に無頓着にして宗敎の智識に乏しき、維新以來排佛毀釋の餘響を蒙れる、今日尙宗敎なるものゝ眞意義を解してゝの正鵠を失はざるものに至りては、彼の滔々たる爲政者敎育家中果して幾人かある

彼等施政者敎育家は全然宗敎は敎育上に何等の補益も無きものゝ如く思惟し、宗敎を敎育上より全然度外視し去らんとするの傾向あるに至れり

要するに敎育上に排宗敎的思想を涵養し、敎育上に宗敎を全く度外視したるは、現今の敎育家爲政者なるものが宗敎そのものゝ智識に乏しきが致す所の結果たらずんば非ず

完全なる倫理敎育には健全なる宗敎思想を必要とす

この說に據ると、健全なる宗敎思想を欲いて居る所の倫理敎育は、不完全であるから世道人心に何等の効果がないのみならず、現代の愚なる爲政者愚なる敎育家は宗敎上の智識に乏しいから、宗敎を敎育上より度外視してゐる結果として吾國民は腐敗墮落したのである、故にこの頽敗は全く日本の社會と爲政者とが自から招いた禍であるといふのである、この說は慥に一顧の價があると思ふ

元來世俗の倫理といふものは、その基礎がグラ〳〵動搖して居るもので、うの事は已に三千年前に吾が釋迦牟尼世尊が警を以て「彩色に膠なきが如し」と仰せられてある、單に倫理道德を以ていくら美麗に彩つて見た處が、肝心の宗敎といふ根底を欲いて居るならば、恰度膠を加へてない繪具のやうなものて直ぐ剝げて仕舞ふ、それ故に聖德太子は國民敎化の大本として、篤く三寶を敬へ」と規定された、これは道義の根

底を宗敎より築き上げられたのである

されば現に腐敗墮落しつゝある吾國民を救濟して、この物與の國運に乘じて能く萬全なる責任を盡くすとが出來又將來彌よ益す發展進步して完全圓滿なる大國民たらしめるには、只偏に國民の精神を道義宗敎の根底より築き上げるより外はない

處が吾國民は外の事には、何事にても相當の智識を具へて居るにも拘はらず、宗敎となると頗る幼稚で甚だ冷淡である、偶ま宗敎心があると思へば忌はしき迷信に陷ゐるといふ風であるから、常識ある人々の中には宗敎とさへいへば、一も二もなく迷信であると速了して、頭から宗敎を排斥する、かういふ人々は自から無宗敎を以て誇つて居るのである、尤も迷信者は隨分厄介なものであるが、追々科學の進步に連れて自から目を醒すやうにならうし、又元々曲りなりにも宗敎心を持つて居るのであるから、努力さへすればその曲りを矯め直して健全なる眞正なる信仰に導き入れるとが出來る、この迷信者さへ絕滅して仕舞へば、無宗敎者もいくらか眞面目な考が起り宗敎の必要を認めるやうになるでもあらうが無論それまで放擲して置く譯には行かぬ、その上に無宗敎者の考は前に述べたる宗敎上の智識に乏しい所の愚なる爲政者愚なる敎育家の考と同樣で、矢張基礎がグラ〳〵した倫理を唯一の賴みとして滿足して居るのであるから、中々世話の燒ける人々である、次に稍や進んだ方では宗敎の研究を企てる人々で、この種の人々の一つの缺點は、宗敎の良否を撰擇せずに只無暗と種々な宗敎に手を出すとて、氣の毒ながら一步を過てば直ちに迷信者と化けるか、或は不健全なる宗敎を信仰するとになつて仕舞ふ、これは固より宗敎の撰擇に注意を怠るからでもあるが、畢竟撰擇する標準を心得ないから起る過誤であらう、故に予は今世界の諸有宗敎を科學的に研究しつゝある宗敎學者が提示して居る條件を掲げて、宗敎研究者の參考に供しやう

抑も宗敎學者は現代の諸宗敎に對して滿足を表して居ない、尤もこれは彼等學者が未だ大乘佛敎の研究を盡さない結果ではあるが、兎に角彼等學者が將來の宗敎として理想して居るものは、凡そ五ッの資格を具有せねばならぬといふ、うの五ッの資格といふは、第一には將來の宗敎は科學的のものでなければならぬ、即ち迷信的の宗敎は科學と衝突して科學の爲めに破壞されるから、何處までも合理的のものが必要である

第二には道德的のものでなければならぬ、迷信と不道德とは甚だ親密なる關係を有して居るもので、迷信的宗敎の實際的道德は誠に時代遲くれの不道德なものであるから宜しくない故に最も開發して居る社會の道德を代表し尙ほ進んで社會の道德をより以上に誘導助長し得る道義的の宗敎が必要である

第三には哲學的のものでなければならぬ、淺薄なる實驗論者

は自から哲學の何物たるやをも了解し得ずして、猥に哲學を度外視する寧ろこれを有害視する、これは實に憫然の至てある、人世は到底哲學を度外視し不用視すべきものでない、哲學を忘却したる宗教、哲學と矛盾する宗教は決して圓滿なる宗教でない、故に皮想的でなく奥妙的なる宗教が必要である第四には世界的でなければならぬ、排外的孤立主義の國家的宗教は宜しくない、開國的自然的對等主義のもの、即ち偏僻的でなく平等的なる宗教が必要である、第五には理想的でなければならぬ、己に人類は理想的動物である以上は、只未來の生命を救濟する計では充分でない、即ち消極的の厭世主義隱遁主義、無爲恬淡主義は宜しくない、能く現世の社會と人類とを改善し發達せしむる活動的、生々的、積極的、理想的のものが必要である、以上の五ッの資格を具備したる宗教こそ完全なる宗教として信賴するに足ると、彼等學者は認めて居るのである

世界の三大宗教として知られてある基督教、回々教及び吾佛教も彼等學者の考では、以上の資格を十分に具有して居らぬと認めて居るのである、成程基督教、回々教は共に彼等學者が本家本元に居つて十分研究を積んで居るから、この二教が未だ充分なる宗教でないといふことに就ては、吾人は敢て異論はない、のみならず以上の五資格を標準として二教を律して見ると、多々不合格の點を指摘し得らるゝのである、慮が悲哉彼等學者は未だ佛教の神髄を知らないから、吾が佛教の正義が以上の資格に適應してあることを解らない、これは獨り宗教學者のみを責むべきではない、名は佛教家でありながら、佛教の本義に惑ふて徒らに學佛法の外道となつておるものが十中の八九まであるのであるから、實に遺憾千萬な次第である、これ等の僞佛教家は一概に總ての佛教は孰れも社會人生を稗益する大なる福音であると思ふて居るが、それは頗る淺薄なる考である、凡そ佛教の大部分の教訓は社會人生に利益がない、のみならず却て人世を破壞する虞がある、この事は到底普通の粗雜なる頭腦では解することが出來ない、これを明晰に解決しやうとすれば、必らず吾が日蓮上人の教訓に聞かねばならぬ、上人は一大佛教の内より迷信的、背德的、皮想的、偏僻的、厭世的、消極的、その他總ての弊害ある部分を除却された、上人の三十年間の生涯は全くこれが爲めに獻身的に奮鬪活動せられたのである、佛教の死活は實に上人に依つて決せられるのである、上人は即ち佛教の一大革命家である、上人は吾人に積極的、生々的、活動的の法華經の大理想と實力とを賦與せられたのである、（然るに何事ぞ、上人の門下と稱しながら、上人の教訓に違背するものありせは、これ大に戒めねばならぬではないか）殊に吾國民は生々活動の持性を先天的に具へてゐるのであるから、勇んで上人の教訓を歡迎せねばならないのである、上人に依て教へられたる法華經の一大信仰に入るものは、始めてうの道義心を根底より築き上げることが出來るのである、今試に經典の一節を示してこれを知らしめやう

未だ發心せざる者をして、菩提心を發さしめ
慈仁なき者には、慈心を起さしめ
殺戮を好む者には、大悲の心を起さしめ
嫉妬を生ずる者には、隨喜の心を起さしめ
愛著ある者には、能捨の心を起さしめ
諸の慳貪の者には、布施の心を起さしめ
懦慢多き者には、持戒の心を起さしめ
瞋恚盛なる者には、忍辱の心を起さしめ
懈怠を生ずる者には、精進の心を起さしめ
諸の散亂の者には、禪定の心を起さしめ
愚癡多き者には、智慧の心を起さしめ
未だ彼を度すると能はざる者には、彼を度する心を起さしめ
十惡を行ずる者には、十善の心を起さしめ
有爲を樂ふ者には、無爲の心を志さしめ
退心ある者には、不退の心を作さしめ
有漏を爲す者には、無漏の心を起さしめ
煩惱多き者には、除滅の心を起さしめ
善男子、是れを是の經の第一の功德不思議の力と名く
（法華經の序分たる、無量義經十功德品の文）

吾國民たるものは須らく叮嚀反復して、この經典の意義を味はねばならぬ、さすれば一と度信仰が決定さへすれば、信仰そのものが力となつて、一面には人生の總ての弱點が自から駈除せらるゝと同時に、他の一面には成佛の大善に到達することが出來得るといふことが會得せらるゝであらう、なんと健全なる宗教の信仰ほど尊ぶべく悅ぶべきものはないてはないかこれてこそ始めて國本培養の道を得たと謂ふことが出來る終りに臨みて、將來法華經的理想が實現せられたる時代には吾人が現に生息しつゝあるこの社會が如何に進化するてあらうか、その時の狀態を日蓮上人の著書中より抄出して、特に吾國民に示さう

天下萬民諸乘一佛乘と成て妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨壤を碎かず、代は羲農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顯れん時を各々御覽せよ、現世安穩の證文疑ある可からざる者也（如說修行鈔の一節）

南無妙法蓮華經

十一、警策篇　1　對内

道法の尊重

山根顯道

道と云ひ法と云ふものは、人の力を以て勝手氣儘に加へたり減したり出來るものでなくつて、天地を貫き三世を通じて一定不變のものである、而して其道法が時によりて盛衰興廢の狀態を呈するのは、全く之を護持するもの丶尊重心如何によつて生ずるのである、

三代目には賣家札と云ふ世諺があつて、一代何十年と云ふ永の歳月、非常に刻苦勵精して粒々辛苦の曉に纒めあげた幾萬と云ふ財産も、一朝其人が眼を眠るが最後、子息嚴の代になると親の心子知らずて、自分共の爲に親爺が殘して呉た財産だとの考は段々薄らいで、そろ〳〵大盡風が吹かしたく名聞が飾りたくなつて來て、勢ひ總ての點に家風が變て來る、それが復孫の代になると少しも辛苦の味知らずて、有るに任せて贅澤の仕放題、倏忽の間に財産はメリ〳〵とはしべりがして、公債證書も株券も他人の手に渡り、家藏宅地も口入屋の手を經て勤奉公、親類縁者の誰彼が口を酸くしての強意見も馬の耳に念佛、さすがの妻君も愛想をつかして里方へ逆戻り家庭の惑亂がとゞのつまりて、大將耻辱も外分もあらばこそ御定法の通り三代目の賣家札、世の中はマー斯ふ云ふ風のが通り相場て、埒もないものてはある、

宗門の有樣もちやうどそんな樣な譯て、祖師聖人が一命を擲つて一代五十年間、國の爲め法の爲め一切衆生の爲めに『鳥は鳴けども涙なし日蓮は泣かねども涙ひまなし』との慈愍攝化を遂行なされた鴻業も、滅後間もなく六門跡の系統爭ひに對外道化の規模は失せ果て、分派支流の對内的財産爭奪に可惜道法尊重の志念を失墜し、宗義法度を等閑視して仕舞た、師は針の如く弟子檀那は絲の如して、本山大寺の冒首達からが斯ふだもの、末法末山の僧俗に至ては、滔々たる流弊極まる所を知らずと云ふ仕儀て、一天四海皆歸妙法の偉大なる宣言は空しく寺門の石碑にみそぼらしき名殘を止め、後五百歳廣宣流布の約束は徒らに藥王品に文字のみ行列をして居るあさましさ、尤も此間の奮然蹶起して、大勢の挽回に全力を傾注し、宗風の扇揚に一命を睹した不惜身命の先師の無つたてもないが、大度の覆へる一木の能く支ふる所にあらずて、唯もう教團の形骸だけを維持して來たと云ふ迄のなさけなき有樣、かくて德川三百年の沈滯時期を經過して明治の御世に到つたのであるから、今日宗風の萎微として振はざるは是非もなき次第であつて、一念祖師の鴻業と道法の衰替とに思ひ及ぶ毎に、慨歎も殘念も通り過ぎて何とも早や云ひ樣のない次第である、

由來道法は宗教の生命であつて、之を尊重すべきは宗徒たる

ものゝ當然の義務である、往事は徒らに歎くとも今更無詮であるから、我等宗徒たるものは宜しく今日只今より、奮然として異躰同心の祖訓に基き、僧俗互に力を協せ、進んで此道法の興隆發達を庶幾すべきである、

試みに祖師當年の御有樣を討究して見ますると、それはどうも此道法を尊重遊ばした祖師の御精神は、實に非常なもので一例を擧げて見ますると御本尊授與の事に就て、房州東條に大尼新尼と云ふ二人の尼御前が有て、兩人共に祖師の御教化を受けたが、新尼の方は他宗教徒の迫害を忍んて、おぼろげながらも信仰を持續したに引きかへ、大尼の方は迫害の爲に信仰の動搖を來し一時權門に退轉して、則ち後先信者の中墮落と云ふ身の上、然る處祖師延山御退隱の後(文永十二年)此兩人より態々使を身延に遣はして御本尊の授與を請願した、祖師の之に對する御返事の如何に嚴格にして而も情義並び到れるか、左の御消息を拜讀すれば一目瞭然である、

但し大尼御前の御本尊の御事おぼせつかはされてれもひわづらいて候(中略)領家はいつわりをろかにて或る時は信じ或る時はやぶる不定なりしが、日蓮御勘氣を蒙りし時すでに法華經をすて給ひき、日蓮先よりけさんのついてごとに難信難解と申せしはこれなり、日蓮が重恩の時なれば扶けたてまつらんために、此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師とをぼしめされなん、又經文のごとく不信の人にわたしまいらせずば日蓮偏頗はなけれども、尼御前我身のとがをばしらせ給はずしてうらみさせ給はんずらん、此由をは委細に助の阿闍梨の文にかきて候ぞ、召て尼御前の見參に入れさせ給ふべく候、御事にをいては御一味なるやうなれども御信心は色あらわれて候、さどの國と申し此國と申し度々の御志ありて、たゆひけしさはみへさせ給はねば御本尊はわたしまいらせて候なり、それも終にはいかんがとをそれ思ふ事、薄氷をふみ太刀に向ふかごとし(新尼御前御返事)

書中領家とあるは、領家の尼と稱して大尼御前の事である、此人祖師の爲めには一方ならぬ恩義のある人で、折角の請求御本尊を授與したいのは山々だが、授與すれは宗法に背くしせなくば尼御前我身の科をば棚に上げ、飽度恨むてあらう、どうも是は困たものだが、併し大切の宗義法度は凡夫の人情抔には替へられないから、斷然授與を拒絶する、之に反して御事(新尼)は表面領家に一味の樣だけれども、信仰は確實だから授與致し申す、なれど御事とても今後信仰を貫くことが出來るか、どうか其邊がいかう案じられる『それも終にはいかんがとをそれ思ふ事薄氷をふみ太刀に向ふかごとし』どうか如何なる大難迫害に遭遇すとも信仰を貫いて呉れよとの、懇切周到なる大教訓である、

此一章に顯はれたる祖師の道法に對する深重の御考慮、何と

も恐れ多い事ではないか、然るに今の本山貫首達は曼荼羅授與をまるで彼岸團子のやりとり同樣に心得て居ると見へて、イヤ開帳何十日間日參の効を賞して授與するとか、イヤ祖像の御衣替寄進の功に依て授與するとか、曰く何、曰く何と夢闇矢鱈に信仰も糸爪も委細れ構なしと云ふ始末、それも眞面目に祖師の御眞筆を拜寫するならまだしもだが、何が宗義も法式も一切れ分りのないづく入殿、勸請式はから無茶苦茶、七面清正公歴代先師等を混入し、甚しきは狐でも狸でも猫も杓子も五一三六、たまけに惡筆で以て自己の花押を祖師の御座に忌彈なくぬしくりつけた處は、大膽とも亂暴とも殆んど名狀すべからざる認め方で、然もそれが金錢欲しさのお愛敬政策、一筆何圓の謝禮をあてに酒蛙々々とやつてのけるとの事、宗法上最も大切なる御本尊に對する無作法侮蔑既に斯の如きであるから、他は推して知るべしであつて、實に今の宗門の現狀は心あるものゝ眼を開けて見る事の出來ない亂れ方である、これをも何とも思はん樣では日蓮門下の僧俗とは斷じて名くべからず、否確かに惡魔の眷屬である、宜しく皷を鳴らして責むべきである、

御本尊の事に就ては、いろ〳〵言ひたい事があるけれども、今はマー此位にして置て、次に檀信徒の是非共心得置くべき祖師の御垂示を一節紹介しよう、

又內房の御事は御としよらせ給ひて御わたりありし、いたわしくをもひまいらせ候ひしかども、氏神にまいりてあるついてと候ひしかば、けさんに入るならば定めてつみふかゝるべし、其故は神は所從なり法華經は主君なり、所從のついてに主君へのけさんは世間にもをそれ候、其上尼の御身になり給ひてはまづ佛をさきとすべし、かた〴〵の御とがありしかばけさんせず候、此又尼御前一人にはかぎらず其外の人々も下部のゆのついてと申す者をあまたをひかへして候、尼御せんは親のごとくの御年なり、御なげきいたわしく候ひしがとも、此義をしらせまいらせんがためなり

(三澤抄)

是は本末傍正に就ての心得事て、老ひ年寄つた身てよぼ〳〵と遙々身延の山へ登り來た內房の尼に對し、神詣での次手に佛の參詣とは以ての外の事だ、それては本末を誤つて居る、輕重を顚倒して居る、傍正を履き違へて居る、左樣な了簡違ひのものには斷じて面會は謝絕する、イヤサ面會してあげたいは山々だが、それては尼御前に罪障を重ねさする道理だ、のみならず若し面會を許したならば、何日迄も其面倒の所作を誤謬とも何とも思ひ浮ばないから、終身改悔の機會が與へられない、仍てお氣の毒だがお身の爲を思ふて、斷然面會を謝絕したとの御文面である、祖師聖人の道法に對する尊重心の如何に嚴格にして、而も親切のこもれる御筆ではあるまいか、尙後最後の『其外の人々も下部のゆのついてと申す者を

あまたをひかへして候』との御筆のしづくは、單に御在世の檀信徒にのみ仰せられたのではなくつて、滅後末代盡未來際迄も此道法を信仰する御門下に潤被すべき偉大なる法の雨ではあるまいか、

然るに今の世の檀信徒と稱するものゝ一般の狀態を見ると、所謂「花見がてらの物詣り」『遊山七分に信心三分』て、京都見物がしたさに本山參詣を鰹節につかひ、東京見物の次手に池上の祖廟を訪ふと云ふ有樣、早い咄が東京の檀家抔と來ては、祖先の墓へ香華を手向くるのみに寺の門をくゞるので、本堂の御本尊に參拜する人はほんの百人中二三の割合、傍正も本末も殆んどお咄になつた段でない、斯ふ云ふ人々に對しては是非共前掲の御文章を篤と讀み聞せたいのである、併し斷して置きますが、拙僧は何も先祖の墓參を決して惡い事だと云ふのではない、子孫として祖先を大切にするのは人道上最も稱美すべき所業であるから、寧ろ之を懲慂するのである、けれども其祖先は何故に寺の墓地に埋葬してあるか、何物に救濟せられて永遠の眠に就たるか位は、少し考へて貰ひたいのである、今てこそ僧侶の多くは、カラ無精を拂へ込んて頓と說教も何もせず、從て檀家にも殆んど信仰の何物たるかを御存ない樣なものゝ、現在檀家たる人々の祖先の時代には其祖先の方々も隨分の信仰心を持て居たし、其導師たる住持も熱心に布敎傳道を勵んだ結果として、淸淨の財施により、廣大なる殿堂の建築を成し遂げ、從て其導師の引導同向によりて事故なく御本尊の御手に救ひ取られ、かくて因緣深き其道場の境內に安らかなる永遠の眠に就たのである、今も猶ほ如何に僧俗共に不熟心とは云へ、葬式を寺へ擔ぎ込む以上は乞度御本尊に救はるべき筈のものである、然るにも拘はらず單に其墳墓のみに香華を手向け、其掃除番をして呉れる因緣て以て僧侶に應分の附屆をしてさへ置けば、それて勘定濟いさこさなしとは、實に妄想顚倒の甚しき次第で、畢竟死だ人が物を言はないから、それて濟む樣なものゝ、若しも石碑の下から頭を擡げて口がきけるものならば、「コラ手前達は何をして居るのだ、乃公に香華を手向くる已前に何故本堂の參詣をしない、乃公は御本尊樣の懷に抱き上られた身の上だ、手前達も早曉御本尊樣の御厄介になる身てないか、何故其大切な御本尊樣を等閑にするのだ、僧侶が云ふて聞かさない迄が其位の事は分りそうなものだ、相當の敎育を受けて物事の分る樣にとの爲にこそ、財產をそれ〴〵子孫に遺して置た筈だが、手前達はなぜそんなに馬鹿には生れ居つた」と乞度叱責の百萬陀羅並べ立てるに相違なからう、

斯ふ云ふ風に洗ひ立てを仕て見ると、今の宗門は僧も俗も押しなべて間違だらけ、轉倒妄想の寄り集り、倒行逆施の巢窟てあつて、正直正意に祖師の御立行を遵奉して居るものは殆んと曉天の星も啻ならず、是れては宗風の不振は寧ろ當然で

ある、どうか日進月歩の世の大勢に顧みて、宜しく猛然として僧俗共に大反省を要すべきである、

特に身佛祖の白毫光裡に衣食して居る僧分のものは一入奮發して、一日も早く宗門をして此弊竇より脱却せしめ、少なくとも祖師當年の御有様に立歸らしむべく、進んでは四海皆歸の御宣言を事實ならしむる様、發憤興起しなければならぬ、

何故に捨てにし身ぞとより〳〵はすがたにはぢよ墨染の袖

眞に此古歌の如くて、袈裟衣は何の爲に着て居るのか、堂塔伽藍には何の資格ありて栖んで居るのか、麥に恥ぢなければならぬ、住處に顧みなければならぬ、身分を知らなければならぬ、

徒らに遊戯雜談のみして明し暮さん者は法師の皮を着たる畜生也、法師の名を借りて世を渡り身を養ふといへども法の師となる義は一もなし、法師と云ふ名字をぬすめる盜人也、恥づべし恐るべし（松野殿御返事）

總じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給へ、智者學匠の身となりても地獄に墮ちて何の詮か有るべきや（十八圓滿抄）

諄々たる祖師の訓誡、宜しく先づ一大懺悔をなして深く心腑に銘刻すべきである、「何故に捨てし身か」を反省しなければならぬ、茲に一言注意すべきは、拙僧の此古歌を諸君に紹介するのは、厭世的消極的意味に於て道世主義の「世捨て人」と云ふことを語るのではない、

すてられて捨てた顔する花かな

と世人に冷笑される受け身を云ふのではない、寧ろ正反對に積極的生々的意味に於て、身を献じて宗門發展の犧牲に供すべく、世界の何物にも替へ難き大切なる一命を大法の爲めに捨てるのである、抛つのである、不惜身命を排めるのである道法尊重の大志念を皷舞するのである、

現世安穩後生善處たるべき此大白法を信じて國土に弘めば萬國に其身を仰がれ後代に賢人の名を留め給ふべし（初心成佛抄）

との祖判の定規に據りて此古歌を活釋すべく諸君に勸むるのである、圍碁に耽る、茶の湯に熱心する、書畫骨董に沈醉する、花卉盆栽に夢中になる、何もそれが一概に惡いとは云はん、されどそれは僧侶の本分を盡した以上の餘暇に「我には本分を其方のけにして可惜歳月をそんな事に空費するのは、確かに吝嗇法師の嚴誡に當る虻度反省しなければならぬ

次に俗士則ち在家の檀信徒に對しても一段の反省を促したい在家の多くの人の弊として、信心とはまことの心だから、何も毎日々々題目を唱へなくても、正直正路に此世の中を渡れば宜しいと、斯様な愚にもかつぬ理窟を云ふ人が多い、それは信心と云ふ意味が分らぬからで、抑も信心の信の字はそんな意味に解釋すべきものでない、一口に云へば信とは『まかす』と云ふことで、御本尊に此身の現在未來を『おまかせ』することを云ふのである、て題目の難有ことを知つた丈て修行をせねば駄目だ、ちようど立派な金側時計を懐中してもねじを掛けて置かなければ時間を見る事が出來んと同じである、

百千合せたる藥も口にのまざれば愈へず、藏に寶を持てども開く事を知らずしてかつへ、懐に藥を持てども飲ん事を知らずして死するが如し（總在一念抄）

とある祖判は此場合を教訓された妙判である、又在家の人は少し法門が知れて來ると、直に天狗と成りすまして兎角僧侶を侮蔑する僻がある、よくない事だ、祖師は新池殿御書に

舍利弗だにも智慧にては佛にならず、況んや我等少分の法門を心得たりとも、信心なくんば佛にならんこと覺束なし

末代の衆生は法門を少分心得れば早や僧を侮り法を忽がせにして惡道に墮つべし、法を心得たるしるしには僧を敬ひ法を崇め佛を供養すべし、

と誡められてある、法門が分れば分るほど謙遜慈讓柔和質直にならなければならぬ、慢心尊大は見つとも無きのみならず煩惱的發作である、心すべきことである、

之を要するに日蓮門下の僧俗たるものは、弊害は必し〳〵改良して、異躰同心の祖訓を遵奉し、努々道法の尊重を忘れない様、宜しく何處迄も勇猛精進すべきである、南無妙法蓮華經

十二、調育篇　其一

佛祖の慰籍、佛子の本領、精神の修養

本多日生

佛陀の教は慈悲の教であります、佛陀のこの世界に御出現遊されて、種々に法を說き給ふたのは、皆慈悲の御用であります、佛陀の御身を如意珠身とも藥王樹身とも申しますが、如意珠身と云ふは、一切の慈悲善根の功德を聚めて備へ給ふことが、丁度如意寶珠の玉の萬寶を包み具へて居る様に、尊き御身なりと申すのである、藥王樹身と云ふは、この藥王樹は大地の底一面に根を蔓らして居つて、一切の草木はこの樹の力より生育つと云ふ話があるから、それから取つて來た譬であつて、この樹を樹の王様としてあります、佛陀は一切衆生の慈悲善根を生ずる根本となつて、如何なる衆生の心の内にも咸くはびこつてあるのであります、斯くの如く佛陀の御身には萬德を備へ給ふ方と、その萬德を働かせて救を與へ給ふ方と、の兩面がありますから、如意珠身とも藥王樹身とも申すのであります、又御說法に就ては、毒鼓天鼓と申しまして毒鼓は邪なる人々に對して、嚴しくその非を叱正し給ふ御教訓である、天鼓と云ふは頑愚なる人々に對して、優しき御語を以て柔かに教へ給ふ御教訓を謂ふのであります、毒鼓は激

烈なる破邪の法輪として現はれました、之を對治悉檀と申し天鼓は優美なる啓發の愛語となつて示されたので、之を又爲人悉檀と申すのである、この悉檀と申すことが即ち佛陀の慈悲の廣大なるを現はしたものであります、悉檀と云ふは悉は漢語で悉く殘りなくと云ふ事、檀は梵語で之を翻譯すると施と云ふことである、即ちほどこすと讀むので、悉檀を意譯すれば「のこらずにほどこす」と云ふことになります、之は佛陀の御悟より出づる尊き智慧なり御功德をば、如何なる人々にも殘らずに施し與へ給ふので、是れ正しく佛陀の慈悲の平等であつて、又圓滿なるを實現されて居るのであります、されば時に對治的毒鼓となつて、嚴重なる破邪の御說法をなさるのも、又時に爲人的天鼓となつて、優美なる愛語の御說法をなさるのも、種々の人々に殘らず佛の道を與へて、同じく第一義と云ふ最上の敎に入らしめ給ふ、慈悲深重の思召に外ならぬのであります

我日蓮上人は佛陀唯一の如來使でありまして、末世濁惡の時に御出現遊されて又能く悉檀の運用かせをなされたのであるその毒鼓の方面は佛敎統一の大折伏となつて、佛敎界の邪惡を正し給ふたのでありますが、さて天鼓の方面は如何であるかと云ふに、甘露の涙となつて天下四衆の人々の頭に灑がれたのであります

訓育と云ふ題意は、廣く取れば毒鼓天鼓の兩方を含むのでありますが、今は天鼓の方面即ち天の鼓の微妙優美なるが如き慈愛の御敎訓に就て、佛陀と祖師との思召をれ話しようと思ふのであります

先づ第一に佛祖の慰籍をれ話し致そうと思ふ、日蓮上人より御弟子最蓮房に與へられた受職と申す法門に就て見まするに日蓮は賤き身なれども諸經の王たる妙法華經に事へ上る者であつて、釋尊は御智惠の悟を妙法の內にこめて頭に灌ぎ給ふてあれば、既に大覺の法王になる位に極まつて居るので、丁度國王の戴冠式がすんだようなものであるが、今日蓮は又この大覺の王位を汝最蓮房日淨に讓り與ふるのである、されば やがて汝日淨は法王の位に登ることが極まつて居るのであると申されてある、この通りに法華經王を奉じて本師釋尊より大覺の王位を授け給ふことを、受職と申すのであります

又この受職の人即ち本師釋尊を頂きて法華經を奉ずる者は、最早如來の聖業を御手傳することになるので、法華經にはこの人の功德を說き給ふて、「一切世間の瞻奉すべき所なり、如來の供養を以て之を供養すべし、如來の肩に荷擔はれん、其の所至の方には從つて禮すべし」と、仰せられてあります、瞻奉すべき所と申すは、瞻はみるとよむので、うの人をみたてまつりて仰ぎ尊むべきであるとの事、如來の供養を以て之を供養すべしと申すは、佛陀に供養し上ると同樣に、衣服飲食伎樂湯藥等を供養すべきであるとの事、如來の肩に荷擔はれんと申すは、佛陀がこの法華を奉ずる者を大切に愛し給ふて、御肩に荷ふて下さるゝと云ふ事で、慈愛の最も至れることを言ひ表はし給ふたのであります、其の所至の方には隨つて禮すべしと申すは、この法華を奉ずる人の行く所には、その行く後ろ姿をも拜むほどに尊敬し渴仰せよとの御勸めであつて、これ等の御敎訓は全く法華を奉ずる者を、愛護し給ふ思召より出たる御敎であります、我等心を靜めてこの愛語を稽へて見ますると、如何にも恐れ入る次第であつて、斯くまでに仰せ下さるゝ、慈悲深重の御心を思ひ上る時、そこに益々道念を堅くして、自ら信仰を磨き、又未だ佛陀の御敎に來らぬ人々に、この尊き慈悲の敎を傳へて、普く平等に御慈悲の光に照さるゝよう、勵む心の起る次第であります、又大覺の王位に就くことの極まつて居ることを深く信じて、この決定心を護たならば、そこに眞實の歡喜が涌き出づることであつて、こゝに人生の憂悲苦惱は、大に減殺されまして、心の底に人知れぬ歡喜をたゝへて、之が爲に知らず識らず善人ともなり長壽ともなり、容貌動作までも整ふて參るのであります

第二に佛子の本願と云ふことに就て述べようと思ふ、佛子と云ふことを廣く取れば、一切衆生皆佛陀の愛子ならざるはありません、經に悉く是れ吾子と說き、御書に我等衆生は五百塵點より己來、敎主釋尊の愛子なりと示されてあります、然し今はこの佛子の中にも佛陀の御敎に順ふ者に出家と在家との別がありますが、今は出家即ち佛陀の御敎に順ふのみならず、進んでこの御敎を世に傳へ弘めて行く聖業をする法師の本領に就て述べようと思ふ

この法師として御敎を傳へ弘めるには、衣座室の三軌に住せよと勸められて居ります、この三つの軌則を守つて行けば、自ら心は平和にして勇健なる思が充ちてきて、而して外は如何なる困難にも打ち勝つことが出來て、法師の本分を盡し得るのであります、是は法華經の法師品に說かれたる聖語であります、さて衣座室と申すは、佛の御敎を傳へるには、先づ如來の衣を著、如來の室に入り、如來の座に坐して、說法すべしとの御すゝめであつて、うの如來の衣と申すは忍辱を衣とすと云ふて、如何なる罵詈惡口を受け迫害られ壓制に出會ても、この辱めを忍びこらへて行く、忍耐力を養生することであつて、この忍びこらへる力を養ふのが、如來の衣を著ることになるのである、縱し金襴の袈裟紫衣の衣を著ましてもこの忍辱の心を養ふてなければ、丸裸の人も同前であります況してや自ら他を誹謗し迫害するが如き邪念ありては、斷じて如來の御衣を著ることは出來ぬのであります、又如來室と申すは慈悲心であつて、我々が佛陀の慈悲に感じて、我心に慈悲心を起しまして、未だ御敎に來らぬ人々を愍み、之を救

ふために眞實心の底より、やさしき心の現はれ來るよう、修養を積むのであります、佛陀に接近うとするには、この自分の心の內に慈悲を喚起すより外に、接近ことは出來ないのである、而してこの慈悲心さえ有つて居るならば、假使林の中樹の下にても、家なき處堂塔なき處にても、その慈悲心のある時その時に於てなされたる說法ならば、如來室に入つて居るのであるから、佛事を成辨して必ず感化の益を與ふることが出來るのであります、之に反して如何に立派な空を凝する程の殿堂に在て法を說くとも、その法師の心に慈悲を失つて居るならば、そこは如來室ではなくて即ち惡魔の殿堂である佛子はこの魔殿に於て法を說くべからず、魔殿に於ける說法は魔事を行ふに過ぎぬのであつて、淺間魔事であります、思へば慈悲心の大切なる事が身に泌み渡るように感せられます如來の室に入れとの仰せは、眞に千古萬古に亘りて佛子唯一の心懸であろうと思ひます。又如來座と申すは一切法空と申して平等の大精神を指すのであります、即ち些少なる事情や宗派的觀念や、その他卑しき考を以て法を說いてはならぬ、一視平等の大道念を以て、正々堂々たる意氣を有つて、何等の畏れなくして、今や身は凡夫なるも、如來微妙の聖敎を傳ふるのであると思ふと、說法せよとの勸である、この衣座室の三軌、即ち忍辱と慈悲と平等との三大精神を以て、御敎を弘めるのが、佛子の本領であります、この三大精神は實に人類の光明であつて、佛陀の御德を世に知らしむることが出來るのであります、さてこの衣座室の三軌に安住して忍辱慈悲平等の三大精神を得るには、一朝の解了のみにては有つことの出來るものでない、之を訓練すると申して、兵士の調練して居る樣に　自ら實地に救濟の事業に就て、日夜その事に當りて經驗しつゝ、ます〳〵進み行くのであつて、子を有つて知る親の恩を云ふ諺がありますが、自ら救濟の事業に就て心配をしてみると、こゝに本師釋尊の御恩の廣大なることも、轉た感せられるようになつてまいります、故に自ら救濟の事業に就かぬ間は、佛子の本領はすこしも進むものでもなければ、又佛陀の尊き所以も、眞實に感せられるものではありませぬ、日蓮上人は、少分の方人仕り候だにも大難忍び難し、釋尊の世々番々の法華經の御方人、思ひ遣られて道理申す計なく候」と申されてありますが、我々とても大なり小なり道の爲に苦勞して見た上でなければ、眞の妙味は感知るものでありません、故に道の爲に艱難すれば、そこに廣大無邊の修行と得益とが伴ふて居るのであります。「艱難汝を玉にす」、「惡人留難をなさずは菩薩行を成じ難し」との格言の通りであります、只安逸をのみ考へて居る者は、佛子の本領を全ふすることは、實に遠くして遠し矣と申さねばなりません

第三に精神の修養に就て少しく述べましよう、前段に三大精神の事を申しましたが、今少し細密のことに就て、一般佛敎徒たる者、即ち在家出家共に磨くべき心懸を申し述べようと思ふのであります

精神の修養は先づこの人生を觀破すことが肝要である、この人生は決して完全なる境界ではありません、如何なる人でも何等かの苦痛を有つて居るのでありまして、一つすめば又一つ、あとから〳〵と樣々の痛苦が追ひかけてまいります、故にその心配をするに就ての、心配の仕方を定て置くのが、大切の心懸であろうと思ふ、之に就て心配の仕方に色々工合のよいのがありますが、一度に述べると何れがよいかと、その辨別に心配されてもならぬから、一番手近い定め安いのをお話しましよう

世間にまさる嘆きだにも出來りぬれば、劣る嘆きは物ならず（內十七佐渡御書）

このおさとしは實に心得安くて、効能がある樣に思ひます、此は世の中には色々の心配が、次から次と絶へぬものであるけれども、大なる心配が出來てくると、その色々の少さき心配はさるでしまうものである、故に少さき心配に出會ふて居る時に、尤も大きな心配の事を考へ出せよ、然らばその大心配が來て少さき心配を追拂ふて呉れるものである、今一例を擧げてみれば、嫁入りする娘が著物の事を心配して、種々と苦情を云ふて居るとせよ、この娘にして若し世の中には幾多の惡遺傳の血統の家に生れて、年頃になつても嫁に行くことの出來ぬのみならず、顏には己にふきでものがして、人に見らるゝことを耻ぢて一室に閉ぢ籠つて、春の花にも夏の涼にも、世の中に出られず、結句は離れ島に別居されて、一生はかなき月日を送くる者あり、又老たる母病める父の爲めに、身を工場の內にくすぼらして、朝は暗きより夜はをそくまで只賃錢を得るために苦心して、而かも日々の生活の費用に足らず、身には垢じみたる破れ衣服一枚よりもたぬ者も澤山あるから、このような世の苦痛の浪にゆられて居る者の事を思ふと、嫁入衣服の少々粗末であるとか、數が少ない位の事は少しも心配てはなくて、我身の幸福を祝ひ喜ぶ心も出て來り又自分のいやしき欲望みばかりでなく、世の不幸の者を憐み慈善の心も起つて來て、立派なる平和の精神慈悲の心に充たされる樣になるのであります、世間には何時の代にも苦勞は堪へるものでない、寧ろ世の文明と稱する生活は、ます〳〵苦勞が多くなつて來るのでありますから、充分にこの精神の修養を致さねばなりません、この修養が積んでまいりますれば、自分には心配することが減つて而して人は自ら尊敬もすれば稱讃もする、この德の上に快樂を有つ　間にならねばなりません

法華宗の四條金吾四條金吾と、鎌倉中の上下萬人乃至日本國の一切衆生の口にうたはれ給へ（外二四條抄）

斯くの如く世の師表となる心懸をもつて、心の玉たみがき、

藏の財よりは身の財、身の財よりは心の財をつむようにするのが、佛敎徒の肝要であります、世の中は如何に拜金の風ふきすさむとも、この心の財をすてゝはなりません、世の財は或は得らるものあり、或は得られざる者あるべし、然れど心の財は何人でも積むことも出來るし、又永世ほろびない自分の味方であります、世の財は遂に自分の用に立たなくなつて仕舞ひます、遠からずして頭陀袋の中に銀紙でこしらへた、穴のある錢六文より多くは入れてもろうことは出來ぬのである、經濟の思想は文明の基礎であると云ふは、尤の事でありますが、文明の眞の光はこの經濟の思想を、道義宗敎の精神修養によつて、適當に整へて行くべきであつて、若し道義宗敎をすてゝ金錢のみを愛するような文明であつたならば、斯る文明は佛の敎の上より、佛の御國として許し置くべきでない、故に道義宗敎を以て人道正義の尊きことを、充分に敎ねねばなりません

又精神の修養に就ては、種々の性癖を撓め直さねばならん

嫉妬諂誑の心なく……諸法を戲論して諍競する所あるべからず……、當に一切衆生に於て大悲の想を起し、諸の如來に於て慈父の想を起し、諸の菩薩に於て大師の想を起すべし(安樂行品)

嫉妬と申すは人の己に勝るを見て、惡くみ嫉む心を云ふのてこの心は女子小人に限らない、餘程立派な人々の中にも動く所のものであるから、之を起らぬように心懸くる事、諂誑と申すは前と反對であつて、己より勝つた人の前に於て、うまいことを云ふてたぶらかすのであつて、是れ亦卑しむべき根性である、斯る卑しき心を取り捨てねばならぬ、諸法を戲論して諍競する所あるべからずと申すは、哲學上のこと宗敎上のことなどに就ても、無益の議論を闘はして諍を起してはならぬ、それは慈悲の敎を守る上より、斯る無益の事によつて感情を害すべきてないからてある、その次の大悲想と慈父想と大師想との三つは、いと尊き御敎てあります、凡そ世の人々を始めとして生ある者に對しては大悲の心をもて、佛陀には慈父の想をなせ、菩薩には大師の想をなせとの勸めてあるまして、下に衆生あり、上に佛陀あり、中に先達の菩薩あり我はこの大悲の想、慈父の想、大師の想をもつて心に充てゝ邪僻の心を去るべしと努むべきてあります

佛子法を說かんには、常に柔和にして能く忍び、一切を慈悲して、懈怠の心を生せざれ(安樂行品)

是れ天竺の愛語てあつて、先づ柔和なれ、能く忍べよ、一切を慈め、懈怠の心を生せざれとの勸てあります

我れ今日より又自ら心行に隨はじ、邪見、憍慢、瞋恚、諸惡の心を生せじ(嚴王品)

この文は妙莊嚴王の邪心を轉じて佛陀の敎に入りたる時の表白てあるが、心行に隨はじと云ふは、邪僻の心の行きにまかせぬことにする、御敎によりて心をたゝし、而して邪見の心憍慢の心瞋恚の心、その他諸種の惡しき心を起さぬようにすると申し上げたのてある、この表誓の如くに苟も佛の御敎に入りたるものは、我性癖の心行に隨ふてはならぬ、必ず御敎を以て心を照して、諸種の惡しき心を捨て去るよう誓を立てゝ、その訓練を積むようせねばならぬ

凡そ感化の功力は、この精神の修養が第一でありまして、この功力なき感化は、その宗敎の生命は滅び去つて居ると申してよいのてある、故に我々は佛陀と祖師の慰藉を聞くにつけても、佛子の本領に鑑みても、又精神の修養を大切とする上よりも、實際に功力ある信仰に入りて、自他の勝益を失はぬよう致したきものてあります

敎戒の所行は安穩快善なり(嚴王品)

佛陀の御敎によつて行ひをきめますれば、身も心も安穩にして、愉快なる生涯を送くることが出來て、且不滅の大果報を獲らるゝのてあります

人のさて　みちびく野邊に　出ぬれば
麻の中なる　蓬をぞみる

南無妙法蓮華經

(ふ　わ　り)

隨喜の筆

横山南山

私は岡山信徒の一人て御座りまするが、殊に統一の愛讀者てあります、先號より大改革もなされて平民的に誰人にても領會し得らるゝ樣に、說敎的の筆て有り難き御法門を感受する事を得まするはまことに結構な次第てあります、『如來壽量品を拜讀致しまするに、惡業の因緣を以て阿僧祇劫を過れども三寶の御名を聞かず』と說てありまするが、かゝる吾人がよい果報を以て人間に生れ、その上に本門の三寶樣をお祭り申す事を得ましたのは、誠に有り難き仕合せではありませんか就きましては先號の序說の本多上人が說示されたる『說敎と聽法とに就て』の御文を拜讀致しまして、大に感激しました事をば拙筆にまかせ、赤誠をこめて茲にこの稿を綴りました。

本多上人の御說の中にも『法師たるの第一の務は說敎てあつて在家者の大切な用心は聽法の心懸てある若し法師にして法を說かず在家者にして法を聽くことを樂まざる樣てあつたならば正法は地に墮ち二世の勝益は消へてしまふ云云と實に現代の如き腐敗せる墮落せる佛敎界に對して金聲の響きある御敎訓てあろうと信じます、就きましては私は此金言をば事實を以て證明致す考へてあります、と申しまして別の事てもありませんが、我岡山敎壇の既往と及び能仁事一上人が活布敎の一班を記します、

由來我が岡山の地たるや先師日鑑及び日容兩師が敎化を垂れ玉ひたる地てある、殊に四個格言問題當時には其主働者たる時の監督布敎師即ち今の管長本多日生上人が大々的活布敎を試みられ、內には信徒に宗義の研鑽をつませられ外には折伏の節刀を振つて權門邪徒を攻擊せられて、以て睡れるが如き岡山宗敎界を覺醒されました、ところが年を經る度びに又少しく宗敎界が睡氣を催して來たのてある、折柄能仁上人が此地に住職されてからと云ふものは又活氣を帶びて來ました、師が熱烈溢るゝが如き大信仰大道念ある事は私が茲に事あた

らしく右言左語云はずとも諸君は既に御承知のれ方樣も多々あるであろうと存じます、師は本多上人が熱誠なる活布敎について又大々的活布敎を試みられました、爲めに我岡山敎壇は又一變して大活氣を帶ぶるに至りました、師は本多上人に習ふて內には信徒の信仰增進を計る爲め每月二、七、五、十の定日は內山下宗義弘通所にて說敎又は演說會を催され、外には自から佛敎篤信會の會長となりて每月自坊本行寺に大演說會を開催され、或は學生佛敎淸話會なるものを組織されて本縣師範學校生徒及び本縣中學校の生徒約一百五十名の會員を以て、每月講話會を催され、或は大久保村に或は白石村に或は旭東布敎所に或は旭町に或は田度村に大演說會を開かれて本化の妙義を唱道せられ、殊には每年春秋二回祖書講義會を開催されて地方の篤信家を集めて宗義の研究に勉めらるゝ篤實に献身的の大布敎をして居られるです、斯く申しますると何だか能仁上人の提灯を持つ樣でありまするが決してそうではありません、私は能仁上人が博學の力を愛慕する者ではありません、本宗幾百千の布敎師の中に於ても隨分と博學多識の人は多くはありまするけれども、能仁上人の如き燃ゆるが如き大信仰、溢るゝが如き大道念を抱持せらるゝ人が少ないのを憤慨くのであります、私は此大信仰大道念ある能仁上人を敬慕するのです、ですから信者としても隨分と熱心な外護の本分を盡す人が又多く出來るのであります、例せば田度一ヶ村を改宗せしめし其導火線を引かれた須山茂三郎氏の如き、一座の說法によりて直ちに良田一町を御供養なされし小野善吉氏の如き、身は其日暮しの人力車夫の身を以て東に到る客あらば安賃以て步を進めて本山大法會に參詣するを例とせる難波某氏の如き、一時は當地の本宗信者を他宗者が呼ぶに君は柿屋宗旨かとまで其熱誠を人に知られたる呉服商柿屋本店主久城茂太郎氏の如き、其他此種の大善事大美擧は枚擧に遑ない程であります、

話しが先に戻りまするが今より五年計り昔、本多上人が岡山に巡敎された時本行寺に大演說會を開催した事があつたです時恰も寺主能仁上人は蓮正會布敎の任務を帶びて九州地方へ錫を飛ばされて居つた留守中の事ですが、本多上人が御演說中の一節に、『今この本行寺の本堂は誠に汚穢いけれども、寺主能仁師にして正義の信念を維持し、信徒にして外護の任を盡したならば今後五ヶ年の後には電氣もともり、本堂の雨の漏りも止まりいと立派になる事は疑もない事である云云』と述べられた事を胸底に記臆して居ますが、其お言葉は事實となつて今秋より庫裡の改築に着手する都合になりましたが既に四千七百餘金の寄附込申があります相ですが實に結構な次第であります、私が心ひそかに案じまするにかゝる美擧をなすに至りかゝる信者を得るに至つたのも皆能仁上人が法を說かれるのをば在家者が樂んで聞きし故であろうかと信じます、そして能仁上人は此位宗門が隆盛に趣ひて來たら少しは腰を下ろして一ブクやられるかと申しますれば中々そうではありません、日夜寢食も忘れて布敎に熱中して居られます、吾れ〳〵信徒とても決して此處に滿足しては居ません尙ほ進んで顯本の光明を地方に輝かすべく勉めて居りますどうか爲大法御隨喜を願ひます、時偶々統一改革を祝するに就きまして隨喜のあまり駄文句を並べた次第であります。(完)

小倉道敏君と其著『常樂院日經』

古定不新

曩きに『日蓮論批論』を書いて、高橋五郎一輩の荒膽を挫いた小倉道敏君は、頃日新たに常樂院日經上人を著された、日經上人は人の知る如く、妙滿寺廿七代の貫主にして、聖祖以來の偉人である、其の信仰の堅固なること、其の意氣の盛なること、其の熱誠に富めること、而して努力と發展、向上と活動とに力めたること、上人の全歷史は實に一の奮鬪史である血涙史である、上人は實に聖祖上人と日本歷史中竝び稱すべき花である、然るに德川の蠻政は、自からの非を掩はん爲め此の上人の歷史を湮滅せしめたので、今日に至るまで、上人に全歷史に就いて一人の之を能く知る者がなかつたのである然るを著者小倉道敏君は、大變之を惜まれ殆ど人心の附いた頃から研究して漸く大成を見るに至つたのが本書である、吾人聖祖門下、殊に妙滿寺門派は、かゝる立派なる歷史を有するを今後誇とすると同時に、著者小倉氏の勞を多とせねばならぬ、更に吾人が誇とするところは、著者小倉氏は、我が顯本宗の信徒たることである、往昔はいざ知らず、今日の文明となりては、宗敎の生命は、僧侶のみによりて、發展せしむることは六ヶ敷い、世の中には宗敎を弘布するには僧侶が本職であるから、僧侶のみに任せて、信徒は唯だ信ずれば足りると云ふものがあるが、之は爾前の信者の話である、大法華經主義の一乘妙典を信ずるものは、かゝる個人主義や消極主義で如何なるものか、自己が信じたらば、ドシ〳〵社會に宣傳して、廣宣流布の實を擧げねばならぬ、一天四海皆歸妙法の實を擧げねばならぬ、我宗小倉氏を有することは感謝して餘りあるものである、記者は本書を披見して後著者を小石川同心町の寓居に訪ふた、

いや拙著に就てどすか、……專門家の糺命と來ては堪つたものではありませぬ、……

私は信仰は大なる事實であると想ひます、身即ち是れ信仰でなければならぬと想ひます、佛樣の前ではれ經を能く讀む、頭を能く下げる、併しながら强慾は恣ひまゝにし、弱者を侮り、强者富者には媚るといふやうな信仰ならむしろない方がましでせう。……

私の日經上人に就いて、最も感じたのは、法華經と同化したことであるのです、上人は全く自己といふものは、無くなして、全く法華經となつて活動し、努力したことであります、……

私は如何かして上人の歷史を活したいと想ひ、即ち上人のありのまゝ、上人の眞相を傳へたいと想ひ、上人の性格現るゝところなら、何處へ當つても障つてもかまはずに書きました、……

と縷々として語られたが、中々熱心で餘程面白いこともあるが紙面が許さぬのではぶき、更に本書の批評を一寸試みやう。本書は僅々百餘頁の小冊子ではあるが、內容は中々豐富で、考証の該博なるは、現下稀に見るところである、殊に文章は氏獨得の熱烈を以て書かれ、看察は奇警にして決して世のありふれた傳記者の比てはない、篇中日經の靈活を叙する邊は全く上人の主觀に立ち入りて、現代を叱咤諷諧するところなどは、實に巧妙を極めて居る、吾人は著者の言ふが如く、信仰は事實である、決して經典學者によりて知り得らるべきものでないとを信すると共に、本書は信仰界の革命兒たるを知るのである、(京都村上平樂寺發兌定價卅五錢)

雜報

○岡山通信　祖書講義會　去る三月八日より十四日まで七日間、山崎町本行寺に於て每夜午後七時より開講・講師は能仁事一師講題は當體義抄、參聽者四五拾名を飲くる事なく佛天の加護により七日間魔事なく結了、滿講當日即ち十四日九時半講義畢るや講師は聽講者に一同に向ひ、訓誡さる所あり、後ち領解談にうつり各自順次に起立して其の所感を說く今其概略を記さんに▲松崎事成師は自己の當体に佛性の具す

る事を知得せるに就ての所感、次に本迹の異目と及び時間圓融の妙義は大に信仰の道念を増進せり云々▲次に三宅壽次、藤原淺吉、難波四郎、安原榮造、人見喜三次諸氏の所感演說▲菱川十一郎氏は自己が信仰の起因を述べんとて起立して曰く一昨年本多管長の御講話を拜聽して以て信仰の人生に必要なるを知得せりと述べ進んで現時の紛亂せる佛教界の狀態を憤慨せられ尚ほ進んて基督教の我國家と相携ふべきの敎理にあらずとて堂々其非を鳴らすと共に本宗の宗風を讃美せられたり氏は未だ本宗信徒に加入せるに非らざれども將來有望の青年なり▲板野常次郎氏の所感演說▲須山茂三郎氏は隨喜所感にかゆるに(治病抄)拜讀▲次に予は幹事を代表して講師及び聽講者諸氏に感謝の意を表彰す▲岡村正義氏は岡山高等小學校長として地方に其名聲高き良敎育家にして在來禪學を修めらるゝ人なるが今回の講義會にて我祖師日蓮上人が偉大なる當体の解決に感激され以て所感の演說ありたり、終りに氏が信仰の發展を祈る▲戸川健三氏は岡山縣立中學校の生徒なるが起立するや聲を勵まして現時佛敎界の腐敗を嘆き是れ皆僧侶の罪なりと論じ彼の基督敎の熱心なる布敎に耻じざるべからず云々▲赤木光信氏矢吹日廣師の弟子とかの前提にてワケノワカラヌ所感演說能仁一十氏の所感演說▲草野松三郎氏は單稱日蓮宗の熱心なる信徒なるが常に彼の宗風の頽れたるを嘆きつゝある憂宗家なるが、先回の立正安國論の講義を拜聽して別勸請の不可をさとり直ちに本門壽量の大本尊に信念を捧げつゝあり云云▲磯島品造氏も同じく同派の熱心家なるが氏が信仰の變遷より別勸請の非を悟りし經歷を述べらる、初め日宗新報の五十二號博士と申す人の別勸請論を讀んで不可と信じ後統一團報の本誓院の本門の本尊を讀んで不可を信じ、後ち妙宗を讀んで不可と信じ、後ち統一團報の中川觀秀師の別勸請論を讀んで不可を信じ、後ち統一團報の小林日至師の捨邪歸正論を讀んで不可を信じ且つ能仁師の說化に依りて終に在來の別勸請を排し本門の本尊に正信を捧ぐるに至れり云云其他諸士の所感演說ありしかども今は略す、

○佛教大演說會　去る三月廿四日午後七時より篤信會の發起にて本行寺に大演說會を開催す廣告其他の準備整頓せると時のよき爲め參聽者一百餘名熱心に拜聽せり各辨士も熱心に雄辨を振はれたり今其辨士及び演題を記せば左の如し。

佛陀の本誓力　松崎事成師
歸命に就ての信仰　山本睿廣師
法華信心の血脈　能仁事一師

無事閉會せしは十時過ぎなりき因みに當日は姫路市信徒中村祐七氏より『予の法華經觀』を篤信會幹事の元へ寄贈せられしにより有志參聽者に施本せり(横山生報)

▲饑饉救濟義捐金送付　客月本團に於て義捐募集のを發表してより慈仁に富める讀者各位の同情を得第一回締切期日迄に送付を受たるもの四百圓に達せしを以て恩賜金の割合に準じ三縣に送付したるに三縣知事は諸氏が厚意を感謝せられ左の謝狀を寄せられたり仍て左に之を揭ぐ

拜啓凶作地方窮民救恤トシテ顯本法華宗內寺院信徒中ヨリ寄贈セラレタル金貳百圓也取纒御送付相成正ニ受領致候御厚情之段縣下幾多窮民ノ爲メ寔ニ感佩之至ニ不堪候尙乍御手數寄贈者諸氏ヘ可然御傳聲被成下度此段依賴旁受領證ヲ兼御挨拶迄如斯ニ御座候敬具

明治三十九年四月九日　宮城縣知事　龜井英三郎

追而物品御寄贈ニ關シテハ別ニ可及御挨拶候也

拜啓陳者非常凶歉ノ狀況ヲ洞察セラレ窮民救助トシテ顯本法華宗寺院信徒ヨリ醵出金御取纒メ義捐相成御芳志忝ク存候目下救濟方法相立居候場合ニ付御趣意ヲ適スル樣可取計候間各位ヘ宜敷御敎聲相煩シ度別紙受領證相添不取敢御挨拶迄如斯ニ御座候敬具

明治三十九年四月八日　巖手縣知事　押川則吉

別紙第九三六號　受領證

一金百貳拾圓也

但本縣凶作地窮民救恤ノ爲義捐

右正ニ受領候也

巖手縣知事　押川則吉

一金八拾圓也

右ハ縣下凶作地窮民救濟ノ料トシテ御寄贈相成御厚志之程感謝不措處ニ候幾多ノ窮民ヲシテ汎ク御高意ニ浴セシメ以テ御寄贈ノ趣意ヲ全スルヲ期シ可申候先ハ御厚禮申述度如此ニ御座候匆々敬具

明治三十九年四月九日

福島縣知事　有田義資

饑饉救濟義捐金領收報告

(第四回四月十日迄分)

東京府

貳圓淺草妙經寺住職里見日潮、五拾錢仝妙經寺內里見はつ、貳圓駒込顯本寺住職山岬日暸、壹圓小石川本念寺大須賀玄遊五拾錢品川本榮寺住職吉田日宣、壹圓四谷法恩寺檀半谷重次郎貳圓品川妙蓮寺住職笹川眞應、壹圓淺草常福寺住職三上義操五拾錢四谷法恩寺檀家中、五拾錢淺草安盛寺檀松本和内、壹圓淺草壽仙院檀營野七郎兵衛、廿錢仝壽仙院檀向山平太郎壹圓淺草常福寺檀佐原政子、壹圓仝常福寺檀芳井佐右衛門淺草妙經寺檀家　五拾錢宛岡田久藏、白鳥滌次郎　福井甚藏●參拾錢宛下田嘉平治、川島藤次郎、宮村しづ●貳拾錢宛井上吉太郎、兒玉潔、水野喜太郎、矢澤萬吉、淸水友吉、鈴木仙太郎、高柳福松、山村熊次郎、久長忠平、市川善兵衛　岡田淸三郎、山本勝之助、岡田榮之助　小林幸助、遠山傳兵衛矢澤よゑ、梅村由太郎、矢野政右衛門、小倉兵藏、増淵又吉佐久間半一郎、小林紋吉、飛山兵吉、仝定吉、宮川榮子、●拾五錢宛総丸幸三郎、石田米吉●拾錢宛小林米男、矢野喜四郎、飛山治郎吉、中里源七、鈴木利三郎、佐久間逢藏　薄田由次郎、高総丑之助、若木末吉、宮村定次郎、石橋七五郎、高山伊三郎、高野源次郎、飛山治郎松、高木吉右衛門、住吉源吉、今井忠順、松本三五郎、岡田よね、小林まつ、並木午吉、山崎仙之助、水野かね、吉田秀三郎、鈴木さだ、岡田あい、川口てる、片山たつ、松澤仙之助、渡邊要藏　片間彌三郎、成島惣三郎、小井川氏●五錢宛小林米男母　水越氏　原田榮太郎、宮村健次重、内田惣助、吉川彌三郎、高江萬吉、飛山武吉、中村與太郎、福原福大郎、梶山入五郎、中西鐵次郎、金澤やを、上田惣太郎、芳村由次郎、小竹吟藏●三錢村松長吉(里見日潮勸募)

淺草常林寺檀家、壹圓宛石井淸兵衛、西山儀助、梶幸吉●五拾錢宛塩谷半三郎、鈴木竹次郎、鈴木萬吉、上村富五郎、石井良久、松村友雄、荒井榮吉●參拾錢木内山松太郎、加藤政八荒井德次郎、西山皆次郎●貳拾五錢鈴木三郎●貳拾錢津田信太郎、鈴木龜藏、小川龜吉、吉野文三郎、鈴木安太郎、福田平太郎●拾錢宛竹中つね、小川翠、三平彌吉●五錢宛森田なを、三浦榮太郎(山田日廣勸募)

東京牛込久成寺檀家　六拾錢乘松房宣●五拾錢宛河野德次郎遠藤權次郎、山口久成、安藤治三郎、安藤直廣、川井卯之助細谷四郎、川村孫太夫、川村享●參拾錢宛伊勝幸作、松下新吉、小林みね、關龜、田坂市次郎、末吉とめ、山岸はつ、下田井重一●廿五錢宛細野子之助、長谷川たみ●廿錢宛小林三吉島保藏、大森体勇(田井日晃勸募)

東京淺草本立寺檀家(第二回)參圓安川繁成●壹圓柴崎守雄●五拾錢宛山口市太郎、三宅豐作、白井仙太郎●參拾錢宛山口半七、山口榮吉、阪本勸造、藤本竹松●廿五錢石垣七郎右衛門●廿錢宛藤本惣太郎、鳴村嘉之助、仝春吉、本杉長松、森千之助、小田源兵衛、宮崎長藏●拾錢宛川村りん、丸山太郎吉、三浦屋芳造　錦きみ

品川本榮寺檀家　五拾錢宛齋藤龜吉、仝與平、仝忠太郎、仝忠次郎、鈴木初五郎、神谷淸次郎●參拾錢宛齋藤金三郎、仝政五郎、鈴木豊次郎、柴田蜂太郎、岩村直三郎、岸善五郎●貳拾五錢鈴木直次郎●貳拾錢宛小野澤作次郎、齋藤銀藏、仝吉五郎、仝元次郎　仝重五郎、仝晋松、松本儀三郎　松村重五郎、植村喜兵衛　鈴木象次郎、天野安太郎、根岸平藏、菅原榮吉、滝田眞明●拾五錢宛鈴木龜吉、樋口淸太郎●拾錢宛岸又兵衛、仝多七、仝菊次郎　鈴木榮次郎　小原吉五郎、龍田鐵太郎、齋藤幸次郎、小野澤寅吉、仝庄五郎、木本龍一、細沼玉木、内田安五郎、大久保なか、●五錢宛伊藤金右衛門池田萬次郎、萩原、幸田淸作(吉田日宣勸募)

京都府

壹圓綾部了圓寺住職吉田完亮、貳拾錢仝了圓寺内日下部辨了

丹波綾部了圓寺檀家　七拾錢遠坂勇吉●五拾錢宛萱田新右衛門、大槻藤九郎、上田新兵衛、森本嘉市●四拾錢宛遠坂龍一郎、大槻久次郎、大槻熊吉、●卅五錢大島嘉助●卅錢宛片山元助、柏原九良兵衛、大槻宗助、阪本寅吉●廿錢宛大槻俊助大島鶴吉、森本勘太郎、●拾五錢宛堀庄七、大槻みね●拾錢

宛徳田藤兵衛、荒木助藏、中村市藏、森治助、大島初藏、全元助、全初之助、木戸憲三郎、平井忠雄、四方武平、大槻英治、吉田政之助、安東金助●七錢宛大槻吉藏、四方辰之助●六錢大槻八之助●五錢宛大橋爲之助、同初之助、同國藏、同和吉、同なか、同辨藏、鹽見宗助、出口富五郎、柏原與三郎、村上佐兵衛、荒木徳三郎、柏原しほ、吉川敬一、木戸完一、新井重吉、伊賀辨藏、井上峰吉、新田佐市、池田辰之助、白波瀬榮吉、西村攝七●七拾六錢總有志（吉田宗完勸募）

大阪府

大阪西高津蓮成寺檀家及信友會信徒（第二回）五拾錢安藤鐵次郎●參拾錢小山音吉、●貳拾錢灘ふじ●五拾錢大阪堀江座木津谷●貳拾錢宛同石田、同吉野、同梅咲、同竹中、同三木同南、同倉嶋、同井上、同正圓、同藤村、同竹内、同井上、同北田、同加藤、同木村、同中井、同山田、同福田、同栗原●拾錢同淺野、同久米、●五錢宛同魚野　同矢野、同大谷、同佐藤、同前澤、同川崎、同福田、同岸野、同荻田、同小林同白井、同久米●四拾五錢同林（以上堀江座分豐澤新左衛門勸募）●五拾錢中野儀平、●參拾錢正田寅松、●貳拾錢宛內山かね、嶋辰藏●拾五錢菅野せい●拾錢宛正田とく、武田、川竹吉松、會久●五錢宛矢田やす、楠木てる、野々村錢新、宇野うめ、丸辰、矢田市松、大中村宗三、野々村金治郎、ひろよ、中野治三郎　正田いさ、同さよ、弓野熊吉、松原喜一郎、中野拾吉、同藤吉、洗屋、萬吉、繁造、藤一、梅吉、嶋丑、吉松、柏木、勝太郎、金治郎、かつ、伊三郎、米山、布引、米山善一、矢田ひさ（以上中野嘉造勸募）

神奈川縣

五拾錢小田原妙經寺小鹽智山、壹圓榑本長寺住職増田聖道、武藏攙本長寺檀家　貳拾錢鈴木寅藏●拾七錢和田キヨ●拾錢宛松阪傳太郎、同又次郎、吉原長久、横溝甚兵衛、同某女、同董次郎、同虎藏、同彌助、同仁平、同ヘヤ、荻野仙藏、鈴木國五郎、池谷ミツ●八錢鈴木九藏●六錢横溝佐助、木村善治郎●五錢宛松阪繁藏、鈴木惣吉、同留七、吉原留吉、木村長吉、横溝伊八、同彌吉、同幸之助、同稻次郎、同平藏、同甚平、同留藏、荻野榮藏、同佐太郎、同政五郎、同太市、澤田丑五郎、繩嶋初五郎●四錢宛横溝良吉、同伊三郎、同ヨシ、同米吉、●參錢宛繩島熊藏、同佐吉、同八郎左衛門、同宇太郎、木村伊左衛門、横溝米吉、同與七、同清太郎、同德次郎、同伊助、同綱吉、同多市、同愛之助、同兼吉、同清次郎、同直次郎、同留吉、同伊之助、同源太郎●貳錢横溝百合太郎、同角藏、同金次郎（増田聖道勸募）

靜岡縣

五拾錢大土肥妙高寺木下圓通、五拾錢見付玄妙寺住職叢日昌壹圓吉美妙立寺住職牧田日禎　拾錢同寺塔中清水純榮、拾錢同寺塔中猪野眞立、拾錢同寺塔中野中道玄、拾錢新所妙經寺壹圓白須賀妙秦寺住高橋遵頌　壹圓太田妙安寺住職石塚日綠

伊豆大土肥妙高寺檀家　五拾錢宛渡邊宗四郎、神尾茂右衞門●參拾錢宛山本初之助、久保田源藏●貳拾錢宛渡邊寶二、小林海次郎、今井爲吉●拾五錢宛梅原房五郎、原斧左衞門、松井金次郎●拾錢宛芹澤常太郎、原喜平梅松井島藏、小林彥藏木下實枝●五錢宛神尾休八、同定吉、　原新吉、高橋萬作、杉山甚平（木下圓通勸募）

伊豆三嶋本妙寺檀家并有志者　五拾錢直井惣兵衛●貳拾錢宛梅原勝藏、木下茂三郎、野瀨九平次、加藤爲吉、直井豐次郎同ぬい、蘆川市太郎、行方多吉助、宮崎さだ、爲本廣吉、原田元右衛門、內野清西郎、渡邊藤田●十五錢宛森三和太郎、岩瀬清松●十錢宛鹽川柳太郎、綺田元吉、高橋垣三郎、同和平、望月角太郎、松浪庄吉、山田儀七、松本高太郎　禱水甚兵衛、石橋千丈、小林勝、石田兵一郎、阪豐新大橋角藏、田村亥之助、村野吉金、原半三郎、鈴梅原貴吉、由太郎●五錢宛亥、渡邊林之助、鹽野又次郎、長木善助、跡山佐助小林玄、宛、大川きよ、松本佐平木村、杉吉渡邊由部衛中山吉左衛門、白井きみ●助袋平個宛一本治右衛門兵室伏治●同壹、佃宛沼上郎、同治平外德名、野角太郎栗原郎四郎、長谷川利、平、又粂藏、同右藏同幸藏佐市芦川直藏、同彥兵衛、同太郎、同與由衛門、同高郎、同源七、同市藏、同は、る初五郎、同宗藏本山は二室伏久次、藏吉田常藏、出口之助吉田宗七、片野淸、須原甚太郎、荒木傳平川大口吉、同由次郎、同茂三郎、吉田佐平、佐藤音二郎、）口文造、山梨福次郎、鈴木良藏、吉田とり（石橋會章勸募）

見付玄妙寺檀家　壹圓宛磯部儀作、包坂勝藏●參拾錢宛杉浦政太郎、鈴木岩吉●貳拾錢宛池間治作　伊藤作重、藤澤與平、同德太郎、森金太郎、加藤彌八、鈴本運吉、瀧澤文次郎、中島庄平、加藤松次郎●拾錢宛森庄太郎、田中德太郎、同銀藏、杉山庄七、原川榮作、長沼保平、吉岡賢次郎、味岡金五郎、磯部丸八郎、鈴木代次郎、同伊代吉、同忠吉、同奥太郎、坂

口藤四郎、匂阪繁藏、山口平次郎、龍光鐵次郎、大久保たの●五錢宛溝口伊平、渥美由藏、中山龜丸　加藤善作、篠津平吉●參錢宛堀田直吉、福宗春（叢日昌勸募）

吉美妙立寺檀家　貳十錢宛吉田文次郎、佐原ちよう、內藤正一●十五錢大瀧平三郎●十錢宛木下要作　野末角藏、同文次郎、佐原半十郎、同文平、吉田勇吉、白井長吉、菅沼庄藏、同作次、林柳次郎、逢坂茂平次、內山重吉、同德次郎、同三十、松野五郎作、佐原高次郎、同善藏、同八三郎、同とさ、同こう、日高圓吉、土屋嘉傳次、同庫吉、小林八重藏、同熊吉、豐田伊吉、井上みね、●六錢加藤喜七●五錢宛飯田太郎吉、吉田嘉平、同次郎右衞門、朝倉五郎作、內山彥七、同十三郎、佐原惣七、同伊平●五十五錢祖師堂信心講（牧田ゐ禱勸募）

白須賀妙慕寺檀家　貳十錢宛山本惣一郎、杉山六太郎、●十錢宛山本ゑい、佐原米藏●五錢宛松野平吉、山本甚五郎、同平吉、同重吉、同重三、同重作、同豐藏、同國松、同晉平、同金平、同長五郎、同又吉、同豐作、彥阪兵吉、同安次郎、鈴木多三郎、藤下清藏、近藤太吉、同平吉、同音次郎、土屋仲藏、藤田米吉、淺井淺吉、同清太郎、永田友次、木下又吉、佐原半七、同新九郎、同春吉、同米吉、同勸七、同新作、同勇三郎、中村仙吉、渡邊善次郎、同佐七　綺田長藏、同崎太郎、白井清吉、柴田八十八、同泰次郎、同福太郎、天野權左衞門、井川勝次郎、同林平、片山茂八、同吉藏、同佐平、●壹圓新町中●壹圓五拾錢東町講中●拾六錢西町講有志●拾五錢元町東組有志●拾九錢開山講女人有志（高橋遵頌勸募）

太田妙安寺檀家　拾錢豐田善九郎●七錢宛石田平次郎、同源吉●六錢豐田六平●五錢宛杉浦兼吉、同喜太郎、豐田又治郎、同勸吉、同儀平、田邊彌會八、石田善作、同周藏、本目源藏●貳拾五錢神座組豐田又吉外十一名●拾錢宛田組水野平藏外三名●拾四錢青平組杉浦竹次郎外三名●拾八錢川岸組豐田仙一郎外五名●拾七錢太田西丁寺西七藏外五名　●貳拾錢中西丁石田源太郎外六名（石塚日綠勸募）

愛知縣

壹圓名古屋常德寺住職名日幸、壹圓同靈山寺住職岡本園正、五拾錢同妙行寺住職武藤顯誠、參拾錢同慈雲院住職佐々木英春、貳拾錢同法道寺內三辻智肇　五拾錢刈谷長遠寺住武藤照惠、壹圓豬川越境寺住赤羽日揮、參拾錢二川妙泉寺住豬野貞宥、壹圓野田法華寺住職西山日諭、五圓野田法華寺檀家中、

壹圓豐橋妙圓寺住職白井日慶、貳圓豐橋妙圓寺檀家中、參拾錢三原當行寺住前田圓整

名古屋常德寺檀家　壹圓太田治三郎●拾五錢日比野貞應●拾錢鹽川滿篤●五錢宛竹內氏、木村氏、富田宗助、市野善長、小野田氏●參錢西村氏（華名日幸勸募）

名古屋靈山寺檀家　五拾錢宛奧村晉慶、副田雪●貳拾錢櫻井武凱●拾七錢大關ます●拾錢宛水谷大雲、牛田正瑞、永田頌太郎、口羽文代（岡本圓正勸募）

尾張刈谷長遠寺檀家　五拾錢大野介藏●參拾錢宛山本實藏、馬場政成、稻垣勝藏●貳拾錢宛三井新助、小板井嘉十郎、澤山重太郎、永谷寅吉、同爲次郎●拾五錢宛松原常之丞、稻垣りき、遠山新平●拾錢宛黑田定衛、澤後平、渡邊莊吉、岡田源彌、同喜代次郎、長谷新太郎、長島熊次郎、老沼研吉、竹中祐一郎、遠山ふさ、野間甚平、犬飼清五郎、永谷つた●五錢宛塚本彌三郎、渡邊藏五郎、山本淺藏、長島儀助、木下ゑい、森平助、星野兼吉（武藤照惠勸募）

尾張緒川越境寺檀家　壹圓深谷銀右衛門●五拾錢宛澤田繁次郎、戸田一郎●貳拾五錢戸田由兵衛●貳拾錢宛水野梅五郎、同茂十、同孫助、新美永三郎、村瀬文次●拾五錢水野市作、同和兵衛、松本半次郎●拾錢古內いち●五錢宛久米治郎右衛門水野植之助（赤羽日揮勸募）

三河二川妙泉寺檀家　●拾錢宛安田幾平、同幹平、加藤繁藏、同太吉、馬塢皐三郎、古井柳吉、淺見愛太●五錢宛加藤惣五郎、同留吉、同友三郎、柴田萬作、星野次郎、內藤小三郎、牧野辰藏、古井文太郎、同要吉、同由、岡頓可、淺見京作、同治郎作、內藤勸七、安田增吉、鈴木藤十●四錢宛土屋寛治、同音八●參錢宛安田榮吉、木下重吉●八錢鈴木みな外三名（野猪貞宥勸募）

岡山縣

壹圓和氣本成寺小瀬木檀家中、壹圓津山本蓮寺住梶木日禎、五拾錢同本蓮寺內梶木妙志、貳圓岡山本行寺住能仁事一、岡山本行寺檀信徒　貳圓久城茂太郎●壹圓宛須山茂三郎、宇垣卯三郎、三田常次郎、横山藤吉●七拾錢原田龍藏●五拾錢宛磯井莊五郎、野上壽惠吉、久城淸吉、小松原熊太郎、見島兵吉、大熊虎太郎、久城とら、野上久七郎、鶴見長昌●參拾錢宛小雀赤一郎、野田虎次郎、丸山三造、渡邊榮吉、天野可舞●貳拾錢宛藤原淺吉、須山寛一、淵野彌助　三宅一夫　內藤武八、北田鷹次郎、進喜久次、小野隆治、中野專次郎　桐

（梶木日種勧募）

（前田日敷勧募）

（大橋日襲勧募）

（堤正音勧募）

（木村日順勧募）

（渡辺武右衛門森川常蔵勧募）

（能勢清次郎勧募）

壹圓金剛地本宮寺住西村會立、五拾錢大澤大澤寺住島本願祐 五拾錢上太田去寺金阪學信、參拾錢小中覺行寺住吉田俊學 五拾錢柴名蓮華寺住齋藤義監、同情袋三吉井光明寺住米倉義 明、壹圓十氣善勝寺住小川日園、壹圓五拾錢下太田萬光寺伊 藤實樹、五拾錢下太田圓德寺住若江乾英、五拾錢萱野正法寺 住笹本日基、五拾錢榎神房眞福寺惣代、五拾錢正法寺檀家有 志中、壹圓永田光昌寺住職栫木日導、五拾錢大木戸善德寺金 田智哲、壹圓五拾錢求名高福寺、横溝日渠、貳拾錢津邊東漸寺 住大塚義有、參拾錢櫻谷妙圓寺、五拾錢大和田寶藏寺、五拾 錢山崎妙行寺●拾五錢山崎榮王寺、拾錢山崎法光寺、貳圓 榎戸新藏寺、貳圓極樂寺本極寺、五拾錢東國吉神房妙照寺 上太田正立寺、五圓五拾錢上太田能泉寺、拾錢五錢妙照寺 錢込正福寺、貳拾錢永田上太田導什寺、拾錢永田圓光坊拾錢 行坊拾錢永田鶴岡惟中拾壹野三願寺、拾錢砂田最光寺 房州館山本蓮寺檀家●貳拾錢宛、中山爲太郎、小芝久治四方 野、庄藏小高同吉造●五錢宛、高橋淺次郎、岩崎源右衞門、師資田眞次郎(中山 造、小高岩次●五錢宛、岩崎源右衞門、師資田眞次郎(中山 智秀勸募)長秀寺彼岸會員參拾錢小阪嘉之吉●貳拾錢宛、齋 上總富津角田庫吉、松下千代吉、横田新藏、佐久間富藏、顯 藤重藏社中●拾錢宛、岩崎小峰之助、郎、佐鈴木金藏、諸 本敦會社中島吉錢宛、松久間柴吉太郎、横渡邊平藏、久間富藏、野 伏平ッ、大中萬吉、佐岩吉、平源太郎、吉、佐久間慶介、田 萬太郎衞門嵩岩拾作、三郎、喜勝大草吉清谷、齋藤庄藏、小 清平キ、横田寅吉、幸(佐野日惺勸募)長谷川奥野勝貞一藏森 阪波八門、同加藤齋藤イナ、鈴木次與五郎、豐長谷川文七宮常吉 阿總相野妙常寺檀家六拾錢北川宛、牧野傳藏、佐久間新藏、鳴北 上增次郎、同勝吉錢甚七、龜藏、清五郎、山下高島重五郎 川豐安衞三宛吉寺次藏郎、在原善次、北川長吉、谷太郎●貳 北川吉本立富錢同同郎、在原留吉、中村体祐勸募) 錢宛星野飯●藏郎 郎宛、在原周輔、野村秀吉●五拾錢 上宛松目保之寺檀家拾庄錢三圓、中村造十五錢 貞次、中本阪助郎星野圓善、影山●周蔵、山崎峰之助●金十 錢總郎、嵜源四重治家貳、吉肥フサ(以上岩崎會眞勸募) 上宛中、谷東光檀村拾三參十鵜澤一郎●廿五錢宛、高 彌總清名幸之助同全眞、同一重吉、貳飯高豐吉、中大村原吉太郎金阪飯同宗高 吉鵜鵜澤倉之助、信一寺、同三吉●十錢宛、大原寅吉、

本上茂五上憲治上己季サ助三本同同本木同上精治藏石上藤平郎同同助上大吉錢同藏健 甚總吉錢總恕郎總之之キ●郎喜健シ寅繁助總作助●橋總二助、傳嘉總原、宛種司、 吉油(稻葉知勇勸募)加宮勸、蛇松助、參助次ケ次太三大●、拾貞清郎、菊吉助栗小市中藏中、 ●井興藤谷募)稗島(渡邊堅沖勸募)●同錢中郎、郎郎郎豆五淺錢三名、仲地、原野太村鵜、村同 參善庄來田本●貳仲宛島同、同、、●谷錢野宛●幸同田千同同嘉本郎久澤同文鍊 拾寺石傳邦鶴錢次、テ吉同政川早拾長板藤、貳谷庄辨代彥庄助圓、藏安作雄太 錢檀衞寺三寺宛郎川ッ藏忠八島野五福倉助板拾本助次太三藏寺同太次●郎 安家門檀郎檀、島、藏、友佐錢寺利、倉錢成郎郎內檀卯同郎郎十、 川、家、家山三初鶴同同藏久宛檀三石淸宛寺石、、、栗木家八仲、五同 秀同同田枝太岡大醍勘、郎家郎橋市、檀井豐渡安原熊、藏司加錢平 司壹貳金拾庫ナ郎キ吉醐之飯●實(井澤宗俊勸募)喜、板家榮田邊井豐太貳同彌藤宛內 ●圓永作錢司カ、ン、種助野拾方廿久同倉藏孫周榮太郎拾安同太久、、 貳宛濱拾、宛、●實、木治、萬錢篤錢太庄菊五(田邊是敎勸募)太藏吉郎●錢藏平郎次大山 拾、菊加林飯貳方同村郎嶋衞宛治宛郎次司拾郎、拾、(草切榮玉勸募)藏、郎原本 錢金松藤常小野錢淸ナキ、田右、郎、、郎、錢鶴司同錢鶴、石良房 安阪、久太倉萬五助ッン豐吉門市、實富、富宛飯岡惣糸宛岡加橋鈴助五 川塚參兵郎平吉厘、、、田太●原木方永同水、高惣藏吉、修藤勝木郎 國廐錢衞●左、宛仝市淸磯郎五半村誠寅作助板熊三、大一常三仁飯、 治、板、五衞宇、ト原宮吉、錢次ナ、吉次三倉吉郎江花野郎吉郎助高石 郎橋倉拾號門津田ミ元彥、實宛郎ッ同、郎郎幸、、口澤俊、、、磯川 ●本茂錢稗、木邊、次右ヨ方、、、讓同●作三同繁亘雄卯尾同中吉仁 十信吉加田林彥半同郎衞田仁鈴山川藏瀧同拾、宅安藏、瀬高啓村三 錢●、藤トヨ治太藏テ、門鐵兵木田嶋、二幸五同平太黑鈴正良藏觀鵜郎 金五貳松、雄郎、ッ川、太、又サ峰川郎三錢百藏郎布川木輔治、治澤、 阪拾錢太(、、宇、島篠郎同治ク吉島、郎板太、、施吉茂、●大郎直加 榮錢板郎石畑山津山千崎、源郎、升片、倉郎日早與ニ之同入原●藏藤 吉橋倉、川安本木崎之猪山作山鈴、岡同淸影野三郎勘伊錢定十、源

吉(大野天養勸募) 上總國府里廣福寺檀家、五十錢木島茂雄●參十錢山崎伊助● 貳十錢宛、川崎久五郎、石倉定吉●十五錢高吉嘉平二●十錢 高吉左一郎●參錢高吉倉之助(以上飯島幸信勸募) 上總山根飯尾寺檀家五十錢大和久石太郎●參十錢宛、木村 倉三、同秀司●十錢宛木村はん、同かと●五錢木村たみ(木 村乾中勸募) 上總山根瀧藏寺檀家五十錢風戸德左衞門●參十錢宛、遠藤 儀三郎、山根恒司、大和久良助、同安太郎●貳十五錢、齋藤房 吉●十五錢宛、大和久半次郎、同久二郎、中島榮之助、風戸 爲吉、同寅吉、蒔田勇次●十錢宛、大和久子之助、同七五郎 同文藏、同芳松、同庄吉、風戸八十吉、若榮彌市●五錢宛、 大和久辰藏、風戸石松(大川日敎勸募) 上總內田本傳寺檀家五十錢宛、泉水治左衞門、小出平兵衞 常澄彌右衞門、林次郎、本吉源四郎、三橋傳次郎●貳十 錢宛、常澄傳次郎、三橋儀十郎、小出米吉、宮代治八●十五 錢宛、近藤已之次郎、小出佐郎●十錢宛、御園生友吉、同市平 常澄忠平、田中角藏、內藤德藏、宮代忠吉、小阪信太郎、同安 藤嘉喜藏●五錢宛、御園生石藏、同安太郎、近藤四郎、同 磯松(栗原日瀧勸募) 下總山梨松源寺檀家貳十錢吉橋辰次郎●十錢杉田藤太郎● 五錢宛、和吉、同善太郎、同吉、栗原常次郎、參錢宛、同ん、小浦清宮 和嘉右衞門、同栗原衞門●貳錢宛、甚右衞門、由良藏、同す、が栗原川吉 同次郎●貳錢宛、(赤地光精勸募) 留木總石清壹錢、小川仁右衞門、作右衞門、次郎、成田常 上總伊大藤十錢宛、同貳十錢宛、同藤吉、方八三貞藏、同啓三郎、鶴田磯吉 鈴木三郎●鶴七助同檀家、熊同、伊藤次郎、同仲郎、次司、同權郎、同田太郎、日次三●十錢忠太郎● 宛●鶴田錢、榮宛鈴、磯吉、四圓鈴菊傳、木地次、安權郎、稗田太郎、同徳源郎、下郎十田屋郎●十五錢 錢松源之五田重、同鍊、鶴田錢宛、吉、四圓錢宛鈴木、石、太十郎、同源、部●錢忠、郎專●十五錢 郎次郎、全錢、瀧成作作宛、吉、宛菊、(渡邊玄雄勸募)文鈴六士太吉 吉松、田●之、七郎、石田熊三郎、渡邊玄雄勸募)次郎音伊藤專●十 源次郎村藏區作、田、熊田三郎、甚郎、今井惣之作、吉藤藏十五 上總小見川安太郎、石太郎、同作、同井新、十、產、喜●貳錢 錢小宮今井藏太郎、(竹次郎、之助●、同二方全太八錢宛 三藏澤東三郎、同大垣、虎石吉田、甚郎、同作、(渡邊玄雅勸募) 弘藏橫川光寺檀家五十錢宛尾小吉宮、澤、見石、常吉、平藏(渡邊玄雅勸募)同 上總南久閒三藏、同及宛有志同石藏十錢、中古牛兵衞、郎●四三十錢 宛、佐久閒藏、同作家太郎、同、石藏十錢、中佐久閒德三郎、同國三十、錢

北田隆治、伊藤豐吉、十錢宛、●參十錢小倉市五郎宛、同源●貳三十錢技磨作、小倉定次郎●貳 十錢一宛、三藏伊藤吉、同小藤●小倉四郎、同郎●三技十錢作、佐久間吉五郎、同 助門、十五錢宛、郎、同富吉、源太郎、同太郎藏、同鑁、佐久間倉吉左 衞仲、同權錢之、小源次郎、同福常郎、次郎中十關、同錢權藏、北田倉吉 同司藏●五錢宛、同、吉同郎、次太間淺次郎、北古田、同太佐久間村杉 德藏、中閑衞吉助、佐久間藏、淺北次郎、中初太郎、同佐市村良 金同、高山五同愛之、吉、小松同鈴同善同藏三吉、郎古國太同芳北小倉 右田門三郎、石衞同門作、小同澤、同倉三次、中田、山野次郎、藏、小市倉 久北、同信八五七四、、北松同、平吉同木北郎●參錢宛、同、六 錢同チエ同●錢同宛、作、仝●次郎、鈴木●鑛宛、ミ、カ小倉 キノ同イキ、チ同、●、●五、佐郎●中十、北田、鈴木デン、郎●、宛、倉持 ツ、同スマ、●十八ル同、ク、同小松同田タイネ、松鈴佐久間同次郎、同キヨ、サダ、モ トヱ●スエ、ト、竹佐久間(小竹俊雄勸募)北貳錢げん、北田サダ、仝 上總海同士安、十錢小竹良久(小竹俊雄勸募) 土岐初奏寺同家田、十錢宛、齋藤福太郎、積田金平●五錢宛 上總小錢五郎●成檀家重五郎十錢宛、藤乘藤助、乘勘藤、藤太秋德次郎 貳十錢野宛●朽英徳家、藤乘眞吉助、乘彥鶴全全、秋德次郎●五 錢大野錢仲宛藏●英檀、●藤清萬吉、仲、全鶴、和郎太郎●參十 全治郎吉仲宛錢作田藏宛、藏全太郎、中、喜全全郎、吉秋十 八郎吉全郎全、久鈴仁作田、源、岩、白、全、全兵一芳郎、太松乘 色茂井吉、全、川吉、全、同白次●清安太郎、作一芳●乘吉、全治 全三彌吉次全五、全大、岩、川次全、藏、太郎同、鈴、石倉定吉 石井吉、川、幸同郎久●六郎、松森、藏、熊全、藏全兵、清十郎 定吉、●庄次木郎、小、同乘、熊全大全一郎、吉、太吉 同音森、爲須佐、藏、平乘藤同、郎、古山吉石倉、辰、吉、郎、之吉 助四御須治助、繁●、太郎、乘藤、吉同、平高橋初太郎 ●廿御錢須、郎、松本平八森庄吉、吉、長五郎●、須 之助(以上齋藤日正勸募) 上總國府如意輪寺檀家、同三郎鐵宛●參十錢、五十錢宛、大塚甚吉 同三總二十錢安吉、同倉吉藏●同十錢宛、渡邊伊太郎、安藤まつ、 同一郎、渡邊四倉郎、同錢與作、同郎渡邊、峰太郎、小高、及川 源太郎、矢部松、同錢宛、同郎、長吉、同義權四郎純 大塚千代、松代●大太郎、吉同丈、同同、卯福吉太飯郎田 佐久間治、良藏郎、同作宛、吉、同、加藤平吉、久、米吉 同平藏、木村常吉、及川彌太郎、長島、磯松、榮同、加藤平吉、白吉 次郎、秋葉茂吉、鈴木松太郎、五同、勇、磯吉、松田、同柿八郎●十五 同廣綱、實、相寺檀家、二十錢宛、太田縫三郎、同柿八郎●十五

錢宛、太田清五郎、管谷恒太郎●十錢宛、山本兼次郎、同久
太郎、大田仁八、菅谷彦次郎（國府關芦綱分井上日沖勸募）
同莊吉福莊寺檀家　二十錢宛、山田進一郎、金阪富藏●十五
錢宛、田中芳藏、山田和吉●十錢宛、時田はつ、金阪庄次郎
同寛一郎、山田松太郎●八錢宛、山田巳之藏、仝勝次郎、金
阪菊松●五錢金阪淺次郎●二錢宛、金阪久五郎、仝箕川三藏、
田中熊藏、金阪久次郎、同義之助●一錢山田喜惣治（渡邊乾
航勸募）
同長谷川正覺寺檀家　五十錢駒逢太郎●卅錢田邊忠吉●十錢
宛、駒林藏、田邊興惣松、同友次郎、同治助、並木庄助、駒
眞治、並木彌一郎●八錢宛、駒金助、駒田太郎●六錢駒庄之
助●五錢宛、田邊金之助、鈴木善吉、駒春吉、並木國松、唐
鎌熊吉、村田松三郎●四錢墻谷吉藏●三錢宛、田邊ろく、駒
源之助（廣部玄通勸募）
仝關本法寺及東光寺檀家　十錢宛、高山與之助、大多和俊、仝
淺次郎、仝忠右衛門、仝卯之助、河野祥吉、仝留三郎、市
郎、北田左衛門治、渡邊樹右衛門、峰島映助、阿曾和助、島田
邊金之助、仝源太郎、仝賢司、定一郎、片岡長兵衛、長山久
五郎●七錢河野孫右衛門●六錢宛、大多和伊右衛門、古巳與
惣右衛門●五錢宛、板倉爲次郎、同龜吉、同岩藏、同克良、
同巳之吉、同卯之助、同與市、大多和吉藏、同德藏、同、八
同直、同平左衛門、同定次郎、高山與左衛門、同藤三郎、河
野孫太郎、同六之助、同佐太郎、齋藤勇治、同所左衛門・高
原治郎作、大塚金次郎、同千代吉、平井ふち、安藤清右衛門
北田重右衛門、渡邊文右衛門、片岡五郎右衛門、[illegible]喜代治、
同爲吉、同一策、諸岡源七郎、野口五左衛門、同彌惣右衛門
綠川國松、同三吉、御園與兵衛、長島義三郎●四錢宛、梅澤
萬治郎、河野庄右衛門、大多和辰太郎、同利助、仝助太郎、
高山丑松、岡曾孝一、小野善久●參錢宛、板倉保次郎、大塚
治三郎、齋藤喜太郎、仝賢司、仝千代助、河野文四郎、仝嘉
一、高山傳四郎　仝清太郎、仝德次郎、仝瀧藏、仝喜治郎、
小川治作、牧野作兵衛●貳錢宛大多和利左衛門、河野金兵衛
牧野作兵衛●壹錢五厘鶴岡清藏●壹錢板倉由藏（森川會般勸
募）
同七、渡龍鑑寺檀家　壹圓岡澤トメ●參十錢宛、白井ナカ、同
モト、同トミ●十壹錢宛中村スノ、仝ミキ●十錢宛、加藤サ
ト、中村良作、仝庄作、矢部庄作●八錢中村金七●六錢宛、
中村儀八、仝精一●五錢宛、長谷川善六、白井文平、中村ノ

ブ、仝啓次郎●四錢高貫四良作●參錢宛、大塚淺次郎、仝ハ
ッ、中村三平、同卯吉、白井常藏、●貳錢宛、中村シマ、同
喜十、同常次郎、仝磯七、仝寅吉、仝德平、岡澤耕藏、大塚
彌一、同德三郎●壹錢宛中村吉重郎　仝庄太郎、仝傳四郎、
加藤元吉●四十七錢五厘上谷區中●貳圓弓渡區中（山本日董
勸募）
高倉高福寺檀家　五十錢宛門倉徹、仝伴次郎●貳十五錢鵜
田幸三郎●貳十錢石井春次●十五錢宛、肩上米三郎、門倉卯
入、仝廣三郎、笹秀松、田中藤太郎、古川增次郎、小出仁三
第、石井卯入●五錢宛、田中德次郎、仝春次郎、大川三四郎
仝宗次郎、門倉庫吉、仝利平、笹寅松　仝房吉、仝定吉（阿
部義貫勸募）
東國吉妙照寺檀家　貳十錢天羽五平次●十五錢宛、川島彌吉
宇田川榮知、天羽羅市郎、西郡伊之吉●十錢宛、永島初太郎
川島初五郎、仝三造、森辰五郎、仝倉吉、山田清三郎、鵜田
德三郎●五錢森田幸太郎中島仙太郎
金剛地本宮寺檀家　二十錢三枝市五郎●十錢林豐次郎母●二
圓信徒十五名（西村會立勸募）
上太田法寶寺檀信徒七、十錢宛、新三關庄太郎、五郎、關屋三十郎、仝春
吉內海三郎、森五郎、七、十錢宛、川新彌三郎、關屋清藏、仝
長造●參錢宛、荒川勘藏、木原彌三郎、成川永吉（金阪學、信
取扱）
柴名連華寺檀家　二十錢宛、石井タマ、常泉ハツ、仝幸藏●
十五錢宛、大住ヤシ、十錢宛、石井茂吉、仝幸吉●五錢宛、大住與
三郎、石川德三ヤシ、仝トラ、仝千代吉、常泉ナヲ、仝吉藏、仝吉、仝市三郎、木
原榮吉、四平、仝マン、仝留吉、仝耕作、仝松五郎、常木島七藏、仝三宛太郎
仝清三郎、石井ヤン、仝キ、仝松代、仝キヨ、仝ミコ、市太郎、仝
森田丹次郎、仝留吉、山リキ、笹金山藏、山崎ナミ、林喜
榮三郎、北畠喜之助、古山耕作、仝金幸藏、仝ヨリ、林
太郎、大住鎌吉之助　（齋藤義監勸募）
吉井光明寺檀家　飯高かの●仝三個宛、白鳥てる
江澤喜一郎、明大藏四個、高庄同情袋四個、飯高かの●仝、藤千代、足立り
谷茂吉、宮市太仝郎寺檀家、一個宛、高庄同、鈴田クラ、藤愛敬、千代松、白一個
宛大谷、川太郎、藤吉、石井三郎●四個宛、鈴田クラ、仝ツカ、サキ、岩太郎、白一
エキ、、仝ッナ、仝、本四郎、作●仝二個宛、藤源吉、仝藤吉、岩鎌田、源吉
傳藏、仝一郎、仝甚之助、次郎、飯高善太郎、仝兼吉、藤井庸雄、田江澤
仝藏太郎、仝次郎、清宮慶三郎、敬、信高兼吉、仝藤
龍一、江澤コサ（米倉義明取扱）

桂安立寺檀家　貳拾錢伊藤ノサ●拾錢宛林仙太郎、林作太郎、大
谷四郎、同シメ、秋葉重太郎、白井寅造、林清之丞、秋葉せ
つ、同てつ、林シナ、小安善吉、石渡藤右衛門●五錢宛、林政太
郎、高山長吉、林勝藏、小安伊東常吉、太郎、林染衛門●同五錢宛、林
渡幸七、伊藤房吉、小安常藏●四錢安藤花藏●參錢宛小安辰
五郎、小倉金藏（伊藤憲洪勸募）
下太田萬光寺檀信徒　壹圓篠崎惣五郎●十錢宛鬼原禎一郎●
參十錢田篠喜作、二十五錢篠崎野田つ●入十る錢●二十錢宛源次鬼
原五英萬光寺檀家　星野文作、八五錢原多田三太郎、健次
仝甚太郎、篠崎藏、國安松藏●石十萬平、宛星野たま、文藏、吉、仝若錢、太郎、仝次郎
次郎、鬼原仲藏●五錢國安松藏、初太郎、山田、仝枝、廣田丑松、鬼
崎ゲンヤン、仝原、全貞惣藏、島、田仁平、次郎、全崎、篠
吉●六錢山本喜太郎、廣田錢宛、全田道藏、次郎、山作
仝竹松、水島川平內、五錢宛、森田道次郎、全米作、全巳
之助、大野ハッ（伊藤實樹勸募）
永田光昌寺及正福寺檀家　十錢今井泉、布施伊三郎、川島藤初
太郎●廿錢伊藤吉藏、清左衛門、喜惣、司三郎、川妻郎、齋藤ヨ
シ三枝アエトヨ、アサ●八錢宛伊藤吉納、全工、大門藤リテ、シルル、八嶋直●
五錢宛小倉源太郎、秋葉大橋金、右衛門、谷川、初太郎、吉、秋葉、全、入、全ム
太郎、全小倉、ノ、山本、大太郎、全衛門、川、太郎、吉、、大秋、リン、、小丈鶴
メ岡彦衛門、左衛門、全、大、仁三郎、全、シ、、布、伊、ラ、、全
右衛門善兵衛常吉衛、高門、知、全尾田賀村、六幸板治右衛土吉、よ惣母ノ、秋
高部屋善衛門左全、高門大平豐知、ア金村山郎秋ト福寺檀家
土居常兵衛、石左ン吉衛、衛鈴田衛、、、高門デン倉ア錢寺
田部居善、石藏左門同宗木田大野鈴田て同、倉門
土田高右岡メ太五シ太永
も助五門同知ふ太本す川
助よ郎組、尾る、郎さ、イ、島
五郎、倉し大、母、助モ常兵門左全、宛三●光
門、小山藏、村石、石左ン吉衛、衛ヒ全小枝廿昌
同知る、野、大て田鈴田衛、、、高門デン倉ア錢寺
ふさ、熊邊同橋る宗木左門大平豐知、ノ源エ田及
太郎、、助キ司與と嘉、左利平、村賀田尾全大、太、邊正
本イ、秋、メ母惣よ吉土衛右治板幸六アノ金村山郎秋ト福
す、葉鶴、兵、屋門衛、倉藏左サブ吉佐本、葉ヨ寺
川島福田太邊郎藏母之村熊邊同橋る宗木左門大平豐知
い岡鈴齋衛河同勘、門長た、衛●、、次仁大ア●檀
ち寅木藤、野之藏大、谷い大門四高土司太橋サ十家
、吉幸と平と柳、藤同川、橋●錢藤屋、郎金●錢
小、三し賀ら助同庫佐常鈴文參宛九庫鈴、右入宛十
倉同郎●さ、、清吉兵藏木七錢多市司木長衛錢伊錢
定久、壹よ加同太、衛、茂、宛都、、吉谷門宛藤今
次米十錢、藤喜郎田、小八秋伊ッ今全太川、加吉井
郎吉屋五秋初代、邊同高、葉藤ヤ井太郎初全納藏泉
母、芳厘葉太松同五兵ま古卯與、仲平、太留清、、
、大太山三郎母七郎藏す山吉左今司、全郎吉左全布
齋橋郎本郎、、郎右、●久、衛井、全タ、、工喜施
藤は、常左菅雄兵衛大二左同門芳吉喜ッ秋大門惣伊
とる同吉衛原子衛門野錢衛ゑ、藏川三、葉藤、司三
し、繁●門さ島、、岩宛門つ山、卯郎全リテ川妻郎
、同吉壹、わ定全同吉、、、本全之、納シル島、、
小ま、錢安、吉角源、伊山同吉タ助石吉、、久川齋
倉さ同宛藤板、藏左同藤野の五ケ、渡、全全入嶋藤
仲、まカ石倉高、衛安愛邊ゑ郎、小丈鶴ム直●ヨ初

次母（朽木日導勸募）
砂田最光寺檀家　十錢宛、林時次郎、北條貞一、秋葉百太郎
梶民藏
平澤本榮寺瑞家　五錢宛片岡芳太郎、池澤留次郎、武野愛之
助、田中仙太郎●三錢岩瀬孫四郎
小中疊行寺檀家　六錢宛片岡喜惣次、武田金次郎、同儀助
●參錢武田良助、吉田佐次郎、同庄五郎、同丸野清吉
同所本壽寺檀家　八錢金阪健藏●七錢武田定吉●五錢有田峰
吉●四錢金阪久五郎、片岡源太郎●參錢吉原重太郎、金阪清
助、武田善作、足立榮次郎、同力藏●貳錢吉原啓作、錢
同所善勝寺檀家　入錢吉原清太郎●五錢吉原幸吉●三錢今井
大郎法輪寺檀家（吉田俊學勸募）
餅太郎、寺廿五錢大野文藏、●廿錢宛大野宗平、同助與●三卅錢大野
仙太八郎●廿五錢宛橋本熊次郎、松戸武助、同與、三郎、石井謙、中
村友入●十錢宛大野太郎、阿部德太郎、中村源次郎、石井
齋戸●十錢宛大野榮次、同亥之助、庄次郎●三錢宛松
松戸常吉、同瀧藏、同ろうつ、橋本りう、同部三庄錢宛
戸よね、同むめ、同きよ、仝よし、仝きん、金阪くま、大野でも、と
いち、仝とき、仝さた、仝きん、橋本りき●五十錢岡本ひで、中
よし、仝喜三郎、阿部くち、橋本りき●五十錢岡谷郷高海谷村仝
中（太田秦龍勸募）
山武郡家之子尋常小學校有志　讀本五十四冊、修身
八冊、手本四十三冊、草紙九帖、墨一挺、大筆卅
三本、筆十四本、紙三四冊、布、水宇紙入二、職員一、伊大藤吉
次郎、仝精筆本十四冊、全ちよ、水、仝、仝、仝武、飯田廣、全、岩、高崎正義
仝爲よ一、四十三冊、石、筆二、留川節、仝、仝、仝、房せ、川仝、仝、河野橋利
吉昇幸、野、し、興行、仝一木仝し、全芳こ、仝中、すつ、ゑ、、、二、仝隊
秋田井、雄、貴良、子貞仝、三郎岩ゑげ石、布十紙
丁西、東、武石條田、仝小手、信奈雄、宮藤、安や貴
も五郎、佐之井昇爲仝精筆本、齋藤、富奈雄野
仝和、三郎仝、武石條田、佐、藤一、美、石田
仝五、三郎、仝、郎、五、口一、齋藤、信、幸よ一十四
と、せみ和五、全郎、瀧五、美、安や、すれ、仝
田とめききよ、遠山口と、杉井谷か、鈴木幹、秋稗之、雄い、筆草
澤とめ、勝田てる、平仝谷か、つ、秋葉田介佐、、布十紙
田小學校長石井君　十五錢宛須原源藏、伊藤源重郎、加藤五
之子學校長、勸募）
大木戸齋德寺檀家

平井潤、仝近、仝富つ、秋稗之、雄い、布十紙
金本士、石阪津屋、橋よたさ、茂ねかわ、仝はる、仝要、鶴並つ
廣田卓、仝りゑ、仝けい、仝榮治、仝ひく、仝房せ、仝秀つ
今關節次、增田はつ、小柳せき、井落きや、澤木ねい、仝一三、九仝三仝
家池鶴林鬼榮、と仝隊利義吉卅身

郎七、門庫吉五郎●十錢宛須藤政次郎、仝きん、片岡善六、仝佐太郎、伊藤文次郎、仝重太郎、仝敬次郎、仝榮次島、仝市太郎、小高治平、門庫まさ、仝常吉、片岡市平、仝ふみ、加藤さと、仝忠八、林にさ●時田新太郎、石塚治良吉、橋本五平治、大關傳平、●六錢高橋ふゑ●五錢宛片岡たけ、仝そめ、仝いち、仝せき、伊藤はつ、仝すゑ、仝源治、須藤とめ、加藤助次郎、時田高五郎●四錢宛林長吉、加藤五平治（金田智哲勸募）

通計四百廿五圓七十九錢五厘

救助袋八十六箇
教科書數種等

總計五百五十五圓八十六錢五厘

顯本法華宗 宗務廳布達

告示第三號　　宗内一般

東京市淺草區新谷町慶印寺ヲ以テ第五定期宗會ノ議場トス

右告示ス

明治三十九年四月七日

顯本法華宗宗務廳

命第五定期宗會理事　大學統　山田日廣
命第五定期宗會書記　中學統　秋葉顯正
命第五定期宗會書記　權學士　增田聖道

顯本法華宗 要品頒布の儀

既に五千部品切れに相成今回第六版相重ね候然る處印刷代製本費等時節柄にて騰貴に付無止左の通り改正候條其御積りにて一切前金にて御申込有之度候

追て品川妙蓮寺若くは統一團へ御申越の儀は手數甚だ迷惑に候條必ず左記の處へ御申込有之度候

一上製壹部金貳十錢（郵税共）
一並製壹部金十二錢（郵税共）

但し何十部にても一切割引不致候

四月　日　　淺草新谷町十四　慶印寺

緊急廣告

東北饑饉 救濟大幻燈

映畫　饑饉實況、宗教、教育、歷史、衛生、農業、戰爭畫、其他

拙者等本誌の義舉を贊し饑饉救助の爲め前記の映畫を以て幻燈傳道致すべきに付き本宗僧俗の有志諸氏は左の所に申込まれ度此段廣告候也

申込所（印播郡川上村小谷流永福寺
山武郡豊海村眞龜淨泰寺）

中村乾信
日暮玄靜
夏目智誓

基礎金及補助金領收報告

一金壹圓（基礎金）　東京盛泰寺檀家　片岡勝次郎殿
一金拾圓（補助金）　岡山市上之町　久城茂太郎殿

右御寄贈相成正に領收仕候也

明治三十九年四月　統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割增但五厘切手を可とす
一讀者申込の節は住所姓名を明瞭にて認めらるべし

廣告料

	一頁	半頁	四分ノ一頁	特別廣告
拾圓	六圓	三圓五拾錢	十五圓ヨリ廿五圓マテ	

明治卅九年四月十五日印刷發行

發行所　統一團　東京市淺草區南松山町四十五番地

發行人　井村尙也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木曄學
印刷所　北澤活版所

腦脊髓精神病　帝國腦病院　東京市神田區和泉町（電話下谷七一七）

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛專門病院を視察兩院にて診察す

精神病專門　青山病院　東京市青山南町（電話新橋二六四五）

本郷根津　眞泉病院（電話下谷四三九）

婦人科產科　醫學博士　千葉稔次郎
醫學士　中島襄吉
內科學博士　野村華造

東京市神田區鎌倉河岸

村上國信君

本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置

きあれば其廣告は全國の公衆一

般に知らるゝ便宜あり